

---

# 輪舞 - 神話異聞伝 - 第一話 邂逅する魂

椎名疾風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

輪舞 - 神話異聞伝 - 第一話 邂逅する魂

### 【Nコード】

N2776M

### 【作者名】

椎名疾風

### 【あらすじ】

廻る魂の記憶。

生まれてきた理由。

それはきつと、終わらせる為。

## 第一話 序の舞

魂は廻る

そこに、数多の血塗られた記憶を孕ませて

宿命という名の必然性に導かれた魂達が

やがて一つとなる時

歯車は動き出す

道が繋がる

彼の地へと。

\*\*\*

ああ…また、あの夢だ。

温もりに触れながら、ゆっくりと、まるで、水の中に落ちていくかのように、意識が沈んでいく。流れ込んでくる悲痛な叫びも、縋るかのように抱き締めてくる力強い腕も、この決定を覆す事は叶わない。

これは、死の瞬間なのだ、と。

誰かの死の記憶なのだと、理由もなく、悟る。

頬を打つ冷たい雫は、誰かの為に流された誰かの涙だろうか。それとも、死に逝くこの身を嘆く誰かに対する罪悪の涙だろうか。

ああ…だって、残してしまう。

ごめんなさい。

謝罪の言葉が零れると同時に、全ては闇に閉ざされる。

\*\*\*

## 第一話 序の舞・2

視界に映ったのは、夜空に漂う下弦の月だった。

深い森の中は静寂に満ち溢れ、耳に届く自身の呼吸がいつもよりも些か荒いことに容易に気付く。横たえていた体を起こせば掛けていた外套が落ち、微かに汗ばんだ己の身体に苦い笑みが刻まれた。森を駆け抜ける風は穏やかなれど、冷や汗に濡れた身体には些か冷たく感じられる。緩慢な動作で立ち上がり、毛布の代わりに掛けていた外套を拾った。

月の位置から見て夜明けはもうしばらく先のことはあるが、どうにも、再び寝入る気分にはなれない。

先程の夢の所為だろうと、漆黒の外套を羽織りながら思う。

幼い頃から、時折、同じ夢を見た。しかし、ここ最近、毎日のように、誰かの死の間際の夢を見る。

微かに届いた葉擦れの音に振り返る。闇を流れた金髪が、夜の支配者の脆弱な光を弾いて輝いた。

「結良<sup>ゆい</sup>」

自分が眠っている間、危険が迫らぬよう少し離れた所で見張りをしていたくれた相手に、柔らかな微笑みを向ける。傍らで四本の足を止めた結良は、その長い尻尾で頬を撫でてきた。

「顔色が優れない。また、あの夢を？」

鋭い犬歯の覗く大きな口から発されたのは、明瞭な人語だった。

心配そうに見上げてくる金色の瞳を見つめ、大丈夫だとその頭を優しく撫でる。気持ち良さそうに細められた獣のそれはしかし、自分の言葉を信じてはいなかった。

「行こう、結良。今から走れば、朝陽と共に森を出られる」

真偽を問うような視線に気付きながらも敢えて無視を決め込み、自らの腰まである巨体の背に軽やかな身のこなしで飛び乗る。一気に視点が高くなった視界を、闇に沈んだ森の木々達が通り過ぎてい

った。

頬を掠める風圧に、深緑の双眸が瞼の裏へと隠される。その先に広がる闇に浮かぶものは何もなく、微かに脳裏に残された夢の残像に、その意味を問い続けた。

\*\*\*

## 第一話 起の舞

橋聖きょうせいは後悔きんごうしていた。自分のお人好し加減に嫌気も差さしていた。そして何より、自分をこんな状況にした原因を恨んでいた。

何度目になるか判らない溜め息を深々とつく。腰に当てた右手は、隠し持っているナイフの柄を握っていた。

市が開かれて賑やかな大通りから二本も三本も外れた路地裏。自分を取り囲む、いかにもごろつきですという顔立ちをしている数人の男達を、橋聖は眠そうな赤い瞳で見据えた。

裏世界で生き残ってきたような連中なのだから、相当強いのだろう。服の上からでも分かるほどに隆起した筋肉が、それを如実に物語っている。

対する橋聖は、どちらかといえば痩身で、身長も平均的な高さしかない。

力の差は歴然としていた。

だというのに、橋聖に慌てる様子は微塵も感じられなかった。空いている左手で、癖のない茶髪を弄ぶ。

会話はなかった。周りを取り囲んだ男達は、静かな殺気を放ち続ける。

そして、動くのも静かで、唐突だった。

「ったく…。めんどくせー事に関わっちまった」

同時に四方から迫りくる男達を見つめながら自己嫌悪に陥っていた橋聖の姿が、唐突に消える。

驚愕と混乱に陥った男達が状況を理解する暇もなく、決着がつくのに、五分と掛からなかっただろう。

血を流して倒れている数人の男達の傍らに優雅に立つ橋聖の右手に持たれたナイフから鮮血が滴り落ちる。薄暗い路地裏で輝きを増した赤色の双眸が、地面に倒れ伏す男達を冷酷に見下ろした。

空気が停滞したこの一角だけ、まるで世界から切り離されたかの

よう。しかし、その錯覚も数秒で終わりを告げる。

興味を失せたかのように男達から外された視線は表通りへと通じる道を捉え、橋聖は右手を無造作に振ることによって血を落としたナイフを鞘に納めた。

「急所は外してあるから死ぬ心配はない。あとは、仲間が見つけてくれるまで待つてるんだな」

独り言に近い言葉は、気を失っている男達には届かない。



## 第一話 起の舞・2

そんな事はどうでもいいとでも言いたげに、橋聖は踵を返して歩き出した。煉瓦を踏み締める硬い音が狭い路地裏に反響し、土地勘のない者はすぐに方向感覚を失ったことだろう。硬質な足音だけに満たされた世界は、時すらも止まっているような錯覚を与える。

「あ……くそ！やっぱ、ほっときゃよかったんだ。ちよっかい出されているのが美人じゃなきゃ、助けなかったのに」

いや、普通に男がナンパするといったら美人だろうと、そんな真つ当な突っ込みを入れてくれる相手は、生憎いない。

複雑に入り組んだ路地裏を慣れた足取りで歩いていた橋聖は、やがて表通りに出た。瞬間、静寂に満たされていた自らの世界に音が戻ってくる。

「しかも、せつかく助けてやったつてのに、一人でさっさと逃げるしき。その所為で、俺の逃げる間がなくなっちゃったじゃねーか」  
つつか、助けておいて逃げる事考えるなよ、と突っ込む相手は、やはりいないわけで。

ぶつぶつと独り言にしては些か大きい愚痴を零す橋聖に通行人から怪訝そうな視線が投げかけられているのだが、当の本人は他者の視線など興味がないのか、気付いていない様子で人混みを歩いていく。

「だいたい、俺はタダ働きは……」

「橋聖！」

雑踏の賑わいを縫って届いた呼び声に、橋聖は足を止める。それと同時に、放っておいたらいつまでも続いていたであろう愚痴も途切れた。

道の真ん中で立ち止まるのはどう考えてもはた迷惑極まりなく、事実行き交う人々の無言の非難を一身に浴びているのだが、完全無視で己を呼んだ声の相手を捜して赤の双眸が彷徨った。

「こつちこつち！」

やがて、燃え盛る炎のような瞳に浮き沈みする一本の手が入る。耳に入ってくる声の高さからして自分を呼んだ相手が誰なのかを既に予測済みの橋聖は、人混みに消えたり現れたりする手の原因に思い当たって笑みを洩らした。往来する人々を掻き分けて進めば、視界があけてずらりと並ぶ露店を視認する。

「よう、アゲハ。景気はいいか？」

所狭しと並んだ店の一つ、薬草を扱っている店の前でびよんびよん飛び跳ねていた少女は、そばかすの散った顔に満面の笑みを浮かべた。

## 第一話 起の舞・3

「順調だよ。これも、橋聖のお陰だね！」

身長差のある橋聖を見上げ、アゲハはVサインを送ってくる。

「そうだろうとも。よく、感謝しろよ」

謙遜という言葉とは無縁の性格なのか、無駄に胸を張る橋聖に、笑顔のままのアゲハは蹴りをお見舞いする。それはどうやら彼の脛を見事に直撃したらしく、痛みに呻いて蹲った彼と彼女の身長差が逆転した。

「……ってーな！何しやがる、アゲハ！」

数秒悶絶していた橋聖は、まだ立ち上がるまでの元気は回復していないのか、暴拳を行った少女を涙目で睨み上げて文句を言うしかない。

「あはは。あたしの感謝の気持ち」

浮かべられた笑みは、何処までも爽やか。けれど、その裏に何故か薄ら寒いものが漂っているように思えるのは、絶対に思い過ぎではない。

が、傍から見れば何処からどう見ても可憐な乙女の花の咲くような笑顔なので、橋聖は危うく怒鳴りそうになった自分を寸前で鎮めた。

別に、他者の視線になど興味はない。興味はないが、如何せん、この世は他者との相互作用によって成り立っているのも事実で、この場面でアゲハを怒鳴りつけ、あまつさえ泣かせたとあっては、十中八九悪者扱いされるのはこちらなのだ、非常に理不尽な事に。そういう経験をそう昔でない日々で一度して、その際面倒な思いをすれば、学ばない方が馬鹿というものだろう。

「……で？何か用か？」

「あれ？怒らないんだね。なんだ、つまんない」

限界ぎりぎりの自制心で何とか怒りを鎮め努めて冷静に訊いてや

つたのに、つまらないの一言で片付けられる。再び膨れ上がった怒りを、橋聖は拳を握り締め何と抑え込んだ。

ここで本能に負けたら、それこそ相手の思うツボだ。誰かの掌の上で踊らされるなど、絶対にプライドが許さない。

「ま、いつか。橋聖、コレ、この前言ったやつ」

肩と拳を震わせて怒り値を下げようと努力している橋聖を放り、露台の中に入ったアゲハが薬草が何十種類と並んだ台越しに紙袋を差し出してくる。

「お、サンキュー」

差し出された紙袋の中身を瞬時に悟った橋聖は、彼なりのお礼を言って受け取った。想像していた重さよりも重量があつて些かバランスを崩すも、しっかりと脇に抱える。

## 第一話 起の舞・4

「じゃな、アゲハ。しっかり稼げよ」

「うん。橋聖も、うちの宣伝宜しくね」

背中を追ってくるちゃっかり発言に軽く手を振ることで応じた橋聖は、先程の不機嫌は払拭された様子で家路へと足を向けた。が、通り過ぎた店の一つから声を掛けられてその歩みもすぐに止める羽目になる。

「よう、橋聖」

立ち止まり、数歩後ろ向きで来た道に戻る。

「なんだ、タタラか。何か用か？」

「なんだとは何だ、馬鹿者」

無意識の言葉遊びは突っ込まないとして、馬鹿という単語には正直に反応した。

「馬鹿って言うな。馬鹿って言う方が馬鹿なんだぞ」

「子供か、お前は」

苦笑と共に置き換えられた言葉に再びむっとした表情になった橋聖は、しかし盛大な溜め息をつくだけに留めた。

「で？用は？」

ついさっきも同じような会話を交わしたなあと意識の片隅で思いながら、出店の店主に再度質問する。

「ああ、そうそう。これ、持って帰れよ」

差し出されたのは、新鮮な魚の束だった。

「イワシ。美味いぞ」

「サンキュー」

躊躇とか、遠慮とか、まったくなかった。好意のおすそ分けを橋聖は礼と共に受け取る。

「お前な…少しは謙遜とか、そういうのはないのか」

非難ではない。呆れたような知人の言いように、橋聖は不敵に笑

って見せた。

「くれるっていうものは、有難く貰っておくのが俺の主義でね」

お前らしいなあなどと、褒めているのか貶しているのかいまいち判らない呟きをはなむけに、橋聖は歩き出す。

帰る場所はそう距離があるわけではないのだが、何故か少し進む度に出店やら通行人やらに声を掛けられれば数分の会話を終えた手にはお土産が増えていくという結果になる訳で、宿屋が視界に入っただ頃には既に空は茜色に染まっていた。

「あ …… 女将、喜ぶだろうなあ」

自慢ではないが、料理は得意な方ではない。結果的に、腕の中の魚やら野菜やら豚肉やらは、そのまま宿屋の女将に引き渡される運命にある。

## 第一話 起の舞・5

食費が浮くわと、嬉しそうに笑う彼女の姿が脳裏に浮かんで笑っている、タイミングよく開けられた扉から女将が出てくるところだった。

(相変わらず、嗅覚鋭いねえ)

口に出そうものなら夕飯抜きになる事など目に見えているので、皮肉は心の内にだけ留めておいて橋聖は人波を器用に避けて広い道を横断した。

「女将。これ、土産」

木製の階段を上がり、何の前置きもなく橋聖は目の前の恰幅のいい女将に手の荷物を差し出す。

「おや、お帰り、橋聖。今日もまた、大量だねえ」

一服する為に出てきたのか、銜えていたキセルを離れた女将は、くゆる煙の向こうで嬉しそうに笑った。ふらりと宿を出て戻ってくれば何かしら土産があるので、既に慣れてしまったいる彼女は宿屋の入り口を開けて男手と呼んだ。

「あ　重かった」

どっこいしょと、まるで年寄りのような掛け声を洩らして大荷物を下に置いた橋聖は、凝った筋肉をほぐすように肩を回した。

「あ、そうだ。女将、これ、アゲハから…」

背を向けて何やら室内に向かって指示を飛ばしている女将の背に掛けられた声は、途中で不自然に途切れた。

「結良」

まるで耳元で囁かれたかのように、明瞭に聞こえた呼び声。

振り返れば、階段下で立ち止まっている女性の横顔が視界に入った。細長い手が差し出されれば、猫のような体躯をした白い動物がその肩に飛び乗る。

上げられた視線。目が、合った。

## 第一話 起の舞・6

「……………」  
何処までも澄んだ湖底の瞳。その美しい輝きから、目が離せなくなる。

数秒の視線の交錯は相手が逸らしたことによって終わりを告げる。この地方では珍しい金髪を揺らして去っていくその背を、橋聖はただ、見つめていた。

「何だい？橋聖。何、見惚れてるんだい？」

こちらの様子に気付いて冷やかしてくる女将の言葉も聞こえていない。差し出していた手から重みが消え、一瞬後に瓶が割れる甲高い音と女将の小さな悲鳴を背に、橋聖は来た道を戻っていた。

「……………」

何かに導かれるかのように、橋聖はその後を追っていた。人混みの中を流れに逆らって歩くのだから当然誰かにぶつかり、その度に罵声の一つや二つをもらったのだが、そんなものは橋聖の耳には届いていなかった。

その瞳はただ、前に行く黄金の輝きだけを見つめていた。

「あ…ッ」

不意に、その輝きが消える。

慌てて駆け出した橋聖は、見失った辺りに一本の細い路地を見つけた。迷わず、その路地裏へと入る。複雑に入り組んだ細い煉瓦の道をあの輝きを探して走る橋聖の耳には、いつも以上に乱れた己の呼吸音が響いていた。

「危ない！」

高い建物が密集する空間をひたすら走っていた橋聖は、突如として飛び込んできた危険を知らせる声に思わず立ち止まった。少し先の路地から飛び出してきた女の、風に流れる金髪が視界を埋め尽くす。



## 第一話 起の舞・7

こちらに向かつて駆けてくる彼女の伸ばされた腕が、橋聖を包み込む。押し倒される形となった橋聖は、受身を取ることすら許されずに背中から地面に倒れ込んだ。

瞬間、目を射た光が空へと昇ったかと思うと、轟音を伴って地面が揺れた。そのあまりの激しさに、橋聖は無意識のうちに自分の上に倒れこんできた彼女の細い体を抱き締める。

爆風が細い路地裏を通り過ぎる。その激しさに硬く瞳を瞑り、何が起きたのかも把握できない頭の片隅でただ、この激しい揺れと爆風が収まってくれる事を祈った。

聴覚を支配していた轟音は、世界の震動の消失と共に掻き消える。静寂が辺りを包み込めば、橋聖は恐る恐るといった体で瞼を上げた。危険が去った事を確認し、起き上がった瞬間に腕に感じた重みにその存在を思い出した。

「おい、アンタ。だい…」

滑り落ちた手が煉瓦の道を叩く。抱き起こした己の手を染めた赤に、言葉が途切れた。

呆然とした様子の炎の瞳が、緩慢な動作で動かされる。向けられたのは、先程彼女が飛び出してきた横道だ。

「…ッ！」

詰められた息。そこには、確かに恐怖が混じっていた。

「なん…だつてんだ、本当に…」

鳴り響く鼓動の音がうるさくて。

零れ落ちたその問いに、応える者はいなかった。

\*\*\*

## 第一話 承の舞・1

最初に視界に入ったのは見慣れない天上だった。半分夢の中を漂っている頭で、ここは何処だろうと漠然と思う。

体を起こしかけ、駆け抜けた激痛に秀麗な顔を歪める。右肩を庇うように上半身を起こし、服の下に巻かれた包帯に左手で目を覆う。思い出せ。一体、何があったのか。

まだ睡眠を欲する脳を強制的に覚醒させ、途切れた過去と今とを繋げようとする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

霞みかかったようだった記憶が徐々に過去を紡ぎ始める。脳裏を駆け巡る光景に、無意識のうちに拳を握り締めていた。

傷口が痛む。それは熱い脈動となつて神経を駆け巡り、硬く目を瞑った間に浮かぶ記憶が決して作り物ではない事を告げていた。

刻まれた記憶が告げる。それは、確信だと。

「起きたか？」

耳に痛い程の静寂が満ちていた部屋に突然響いた声に、驚いたように顔を上げた。視線を遣った先で、中途半端に開けられた扉を背に立つ青年の赤い双眸と目が合う。癖のない茶色の髪が、開けられた扉から入ってくる風に揺れた。

「貴方は……」

音になつた言葉は相手への問いというよりも独白に近い。頭の片隅に残る記憶を思い起こそうと、その深緑の双眸が細められる。

「他人に名前を尋ねる時は、自分からつてのが礼儀つてもんじやないのか？」

後ろ手で扉を閉めた相手の、些か不機嫌そうな問い返しに、妙に納得した。

「<sup>なき</sup>風、と」

礼節に欠けると承知で、いまだ鈍痛を訴えてくる肩の傷にベッド

の上に上半身を起こした状態で風は近付いてきた青年へと頭を下げ  
る。

## 第一話 承の舞・2

凧、と。ベッドの傍らに置いた椅子に腰をおろした橋聖は口の中  
で呟いてみる。

訊かなければならない事があつた。

そう思いながらも、喉まで出掛かった言葉はしかし音にならない。  
意識の遙か奥深く、魂が、目の前の相手に問いかける事を拒んでい  
た。

それでも。

「…お前が、殺したのか？」

微かな震えを帯びた声が、真実を問う。

ゆつくりと上げられた湖底の瞳は、唐突な問いにも揺るがない。

心の奥底まで見透かすかのような静かな眼差しに、橋聖は逃れるよ  
うに視線を外した。

脳裏に焼き付いている光景がある。

切断され、血の海に沈んだ肉塊。原型を留めていなくても、残さ  
れた欠片からそれが元は何であつたのか、理解するには充分な光景  
だつた。

あれは、人間の成れの果ての姿だ。何人も人間が爆発の衝撃で  
ただの肉の欠片に変わり果て、それが誰であつたのか判別出来なく  
とも、人間だつた事には変わりはないもの。

何故、そんなものがあつたのか。

何故、あれ程の爆発がありながら、自分以外の誰一人として、認  
知していなかったのか。

「答えを、くれ」

お前は、全てを知っているのだろうか？

「……………」

確かに感じていた視線が外されたのを確認して顔を上げれば、瞼  
を伏せた思案顔が映る。そこには情動は現れず、お世辞にも広いと

は言えない室内を満たす静寂に孕まれていたのは、果たしてどのような感情だったのか。

「私にも、詳しい事は判りません」

長い沈黙を破って返ってきた曖昧な返答に喉まで出掛かった言葉は、上げられた深緑の双眸に奪われてしまう。自分を映し出したその瞳の輝きは、決して嘘をついてはいなかった。

## 第一話 承の舞・3

逸らされた瞳は、窓の外を眺め遣る。

「貴方は、この世界の異変に気付いているのでしょうか」  
話の急転換に、橋聖の反応は数秒遅れた。

「…ああ。最近、地震が多い気がする。それに…」  
続けようとした言葉は、突如襲った衝撃に途切れる。反射的に椅子を蹴り飛ばして立ち上がった橋聖は、深傷の身である尻を庇うように抱き締めた。

身を貫くような縦の震動に、橋聖は唇を噛み締めて耐える。激しい大地の揺れにただ置かれていただけの家具類は床に落ち、毎朝女将が換えてくれる窓枠の花瓶が割れる甲高い音が響いた。

大地の怒りは中々収まらなかった。時間の経過がいつも以上に長く感じられ、駄々をこねるように小さな震動を繰り返してようやく地の神は機嫌を直したようだった。

「大丈夫か？」

震動が完全に収まった事を確認した橋聖は、覗き込むようにして相手の安否を気遣う。

「ええ、大丈夫です。ありがとうございます」

肯定の言葉に添えられた微笑みに憂いを払われた橋聖は一度頷く。相手を放し、しかし己の右手の指を赤く染める鮮血を視界に留めて慌てた。

「あ…悪い！俺、気付かなくて…」

無意識の行動だったことが祟り、庇おうとした己の行動が逆に相手を傷付けていたらしい。地震が収まるまで傷口を押さえ付けていた事に、呻き声一つあげなかった尻に橋聖は情けない顔で謝罪を繰り返した。

「ほんと、ごめん。包帯…止血…って言っても、俺がするわけにはいかないよな。ええと…」

血の滲んだ包帯を替えようと真新しいものを持ったはいいが相手  
が女子である事に気付き、あたふたする橋聖に風の唇から笑みが洩  
れる。伸ばされた左手が、そっと彼の頬に触れた。

## 第一話 承の舞・4

「落ち着いて。大丈夫ですから」

予想もしていなかった事態に、冷たい手だなど、驚きを通り越して冷静にそんな感想を脳は導き出す。

「ね？」

「…あ…ああ」

問うように小首を傾げられれば、ようやく現実に戻ってきた橋聖はそれだけ返すのが精一杯だった。冷たさが離れれば、自然と落ちる腰。が、そこに椅子はなかった。

「…つて…ッ」

先程自分が椅子を蹴り飛ばした事をすっかり忘れて座ろうとした橋聖は、空気が人間の重みを支えられるはずもなく、当然の如く床に尻餅をつく。

「腰打ったあ…」

涙目で橋聖は鈍痛を訴えてくる腰をさする。そんな彼の耳に、控え目な笑い声が届いた。

顔を上げれば、肩を震わせる姿が映る。初めて見せる彼女の笑顔に、橋聖は腰の痛みも忘れて魅入ってしまった。

自分へと向けられる視線に気付いたのか、動かされた深緑の双眸が見上げる形となつている赤と出会う。自然と笑いが収まれば、必然的に見詰め合う形になる二人。

問うように小首を傾げれば、その頬を金髪が撫でる。それすらも美しく見えて、果たしてその頬を赤く染めたのは差し込む夕陽の光だったのか。

「あの…大丈夫ですか？」

床に座り込んだまま微動だにしない理由を、彼女は別の意味に受け取ったのだろう。心配そうな声に、橋聖は我に返った。

「あ…ええと…だ、大丈夫…です」



顔を背け、慌てて橋聖は立ち上がる。俯いた自らの頬が熱を帯びている事には気付かない振りをした。

## 第一話 承の舞・5

「貴方は？」

一度は手にした包帯を結局元の場所に戻し、起こした椅子に腰をおろした橋聖へと唐突な問いが投げ掛けられる。

「え…？」

「名前。私は名乗ったのだから、教えてくれるのでしょ？」

ああ、名前か。

「…橋聖だ。閣橋聖」

淡く微笑む尻に、深い溜め息を一つ吐くことで動転した気を鎮めた橋聖は、手を差し出した。軽く握り返してきた手は、やはり冷たかった。

「どのような字を？」

「橋に聖と書いて、橋聖」

返答に離された手が顎に添えられる。考え込むようなその様子にどうしたのだろうかと橋聖が口を開く前に、ああと、意味ありげな声が薄い唇から洩れた。

「きょうせい …豊饒の神の名ですね」

驚きに瞪られる赤い瞳。

『キヨウセイ』とは確かに詞深神話（こしなみ）に登場する豊饒の神のことで、その土地の言葉で『巨焼（きょんしょう）』、つまり炎を表す。しかし、詞深神話は北方のごく一部にのみ伝わっている神話で、橋聖の育った村周辺の者達しか知らないはずだった。

それなのに、何故、彼女がその名を知っている。

先程の遣り取りで解けかけた警戒心が再び橋聖の中に芽生える。自然と鋭さを増した視線が未だ考え込んでいる相手を射抜いた。

「お前」

アルデー  
「民俗学者」

何者なのかと、困惑と警戒が入り混じった橋聖の言葉を遮ったの

は、朗々とした声音だった。

## 第一章 承の舞・6

「え…？」

零れた声は、自分でも間の抜けたものだと思った。ならば、動かされた深緑の双眸に映るのもまた、馬鹿面であろう。

「何故、私が北方の一部にしか伝わっていない神話を知っているのか、不思議に思ったのでしょうか？」

雰囲気が物語っていましたよと、困ったような微笑を浮かべる風  
に、橋聖は疲れたような溜め息について無意識のうちに強張ってしまつた体から力を抜いた。

民俗学者。

成る程。各地に伝わる民話や神話を己の身で見聞きし研究する旅人ならば、局地の伝承を知っていても何ら不思議はない。

そして、苗字がない理由も。

「詞深神話は、一年程前、孤龍大陸を旅していた時に地元の方から聞きました」

「孤龍…」

懐かしい響きだ。

神海しんかいに浮かぶ、首都陽蘭しやうらんのある神鳥大陸しんちやうだいりくより遙か北、北海に浮かぶ小さな大陸、孤龍大陸が橋聖の出身大陸だった。橋聖の育った神撫村かんなは、その大陸の更に北に位置する。

気候は寒冷に属していた為に作物はあまり育たないが、その代わりに良質の金が採れるので経済的には豊かな大陸であった。

## 第一章 承の舞・7

脳裏に浮かんで消えた陽気な両親の笑顔に、炎色の瞳が細められる。

「ご両親に、会いたいですか？」

「……は？」

仕舞われた懐中時計を鎖が撫でる摩擦音が小さく響く。

民俗学者は、閉じられた世界では日常生活を乱す異端者としか映らない。その警戒心は時として敵意となつて旅人へと向けられ、過去には悲惨な殺人も起こっていたそうだ。無益な争いと無残な結果を生み出さない為に、いつの頃からか、民俗学者達は自分達の身分を証明する懐中時計を持ち歩くようになった。

凧も例外ではなく、身分証としての懐中時計を仕舞った彼女の問いかけに、橋聖は怪訝そうな顔をした。

「親に置いていかれた子供のよ様な表情をしていましたよ」

親に置いていかれた子供　　自分は、そんな表情をしていたのだろうか。

(…ま、あながち間違つてはいないか)

遠い、遙か昔の記憶だ。

おぼろげに覚えている。自分と呼ぶ、母の声を。

## 第一章 承の舞・8

部屋の扉を控え目に叩く音が、橋聖を過去から今へと引き戻した。急かすように先程より些か強く戸を叩く音に、椅子から立ち上がった橋聖は扉を開けてやる。

「ああ、なんだい。無事だったんだね、橋聖」

「女将も。怪我がなくて安心した」

いつもは笑顔を絶やさないその顔に浮かべていた不安を安堵へと換えた女将へと、橋聖も勞いの言葉を掛ける。

「おや、起きたんだね」

扉の隙間から見えた室内のベッドで体を起こす凧を視界に入れた女将は、彼を押しつけるようにして入ってきた。

「橋聖が怪我したあんたを連れ帰ってきた時は驚いたけど」

女将の足は凧の前を通り過ぎても止まらなかった。先程の地震によつて床に落ちて割れた花瓶を慣れた手付きで片付けながら、この宿屋の主は言葉を続ける。

「意識が戻つてよかつたよ。何せ、あたしの香水をおじゃんにしてまで橋聖が追いかけた娘だからね」

女将の口から香水という単語を聞いた橋聖は、しまったという顔をした。あまり記憶にないが、そういえば、宿屋の入り口で女将愛用の香水の入った紙袋を落とした覚えがある。

「女よりも三度の飯が大事な橋聖が昼食もろくに摂らないで傍にいた理由が分かつたよ。確かに、同姓のあたしから見てもあんたは美人だ」

「女将！」

床に散乱した花瓶の欠片を水を引き取った布にくるみ、ベッドの傍らに立って凧の顔をまじまじと見つめた女将の素直な感想に、橋聖は非難の声を上げる。しかしそんな彼女など綺麗に無視した女将と、彼女の言葉の意味を酌まなかつた凧との間で会話は進んでしまう。

「では、貴女が私の手当てを」

橋聖との遣り取りで自らの身に刻まれた裂傷の手当てをした相手が誰なのかを知った凧は、深々と頭を下げた。

「有難うございます。ご心配をおかけしました」

「礼儀を知っている子は嫌いじゃないよ」

快活とした女将の声は些か大きく部屋に響いたが、耳に心地よい。

## 第一章 承の舞・9

「あんだ、名前は？」

「凧と申します」

淡く微笑めば、働き者に特徴的な些かごつい手が乱暴に凧の金髪を撫でる。

「じゃあ、凧。お腹空いていないかい？夕飯の準備ができたんだが」  
「女将。地震の影響はなかったのか？」

意図的に世界から排除されていた橋聖は、ここぞとばかりに強引に話に割って入る。

「橋聖。あんだ、何ヶ月ここにいらんだい？このあたしが、料理を粗末にさせるとでも思っているのかねえ」

世界に割り込んだのはいいが何とも怖い笑みをいただくという結果に終わった橋聖は、引き攣った笑みを浮かべて口を噤んだ。

激しい神の怒りにも決してテーブルの上に置かれた鍋とか鍋とかを決して離さない料理場の男衆の囃、という光景が易々と思いつぶのは何故だろう。

「一階まで降りられるかい？それとも、ここに持つてこようか？」

一階まで降りられると、毛布をどけてベッドから降りようとした凧を、女将が止めた。

「凧。あんだ、出血してるじゃないか」

些か乱れた衣服の下に覗く包帯を染める赤に、女将の顔が険しくなる。

「橋聖」

厨房での男達の奮闘を心の中で賞賛していた橋聖は、女将の呼びかけに慌てて返事をした。

「廊下に出てな」

「…は？」

「あんだ、女性の裸を見るつもりかい？」



突拍子もない命令に間拔けた声を上げた橋聖を、女将は馬鹿にしたように鼻で笑う。

包帯を手に尻の傷の手当てを始めてしまった女将の背に非難を籠めた視線を投げつけ、橋聖は言われた通り素直に部屋を出た。女将の言う通り、流石に彼女の手当ての場面を見るわけにはいかない。

## 第一章 承の舞・10

廊下に出て薄汚れた壁に背を預ければ、階下の喧騒が微かに聞こえてくる。そういえば今は丁度夕食の時間だったと、先程の地震がさほど町人の日常生活に影響がなかった事に橋聖は安堵の溜め息をつく。

本当の親を見つけて来いと、育ての親の言に従って旅を始めて三年。北海に浮かぶ馴れ親しんだ孤龍大陸を離れ、神鳥大陸を挟んだ対極に位置する南海に浮かぶ翼鳳大陸よくほうに降り立ったのは、半年程前の事。

微かな鎖の擦れる音を伴って、橋聖は服の下に隠してあった首飾りを取り出す。錆の目立つ鎖に繋がっていたのは、彼の瞳に宿る色と同じ、燃え盛る炎の色をした水晶だった。

「本当の親、ねえ……」

記憶に残った母の呼び声。果たしてそれが真実なのかすら、橋聖には分からない。ただ、まるで人目から隠すかのように捨てられていた自分に唯一残された肉親との繋がり、この小さな水晶玉だった。

「……」

目の前に掲げた赤色の水晶を見つめる横顔は、先程の凧の言葉通り、親に置いていかれた子供のような、微かな不安を含んだ哀しげな表情をしていた。しかしそれも数秒で、扉が開く音に橋聖は首飾りを服の下へと仕舞う。

「橋聖。何ぼさつと突っ立ってるんだい？凧を抱きかかえて階段を下りるくらいしたってバチは当たらないよ」

口を開けば人を小馬鹿にしたような言葉が弾丸のように飛び出してくる。よくそんなに言葉の貯蔵があると呆れながらも、橋聖は女将の言葉通り瘦身の凧を軽々と抱え上げてしまった。

「……え？あ……あの……」

突然の事に動揺する凧を無視して橋聖は歩き出す。

「あの…橋聖さん。自分で歩けます」

「いいんだよ、凧。今日のところは甘えときな」

何で女将が応えるのかと、心の中で毒づきながら、橋聖は腕の中でどうしたらいいのか困惑している様子の彼女に気にするなと言落とした。

## 第一章 承の舞・11

同型の扉が等間隔に並ぶ光景を左手に流しながら廊下を歩き、中央に設けられた階段を下りていくと次第に喧騒が大きくなる。階段を下りきると、お世辞にも広いとは言えない食堂はほぼ満席状態だった。テーブルに着く人々の服装も様々で、仕事帰りだと思われる者もいれば、この宿の宿泊客だと思われる者もいる。

しかし、一番目につくのは、中央のテーブルを陣取った十人程の男集団だった。一見して、鉱山労働者であることが知れる。何か余程良い事があつたのか、酒を飲み交わしながら騒いでいた。

「騒がしくてすまないね。いつもはもう少しましなんだが、今日はやたらと機嫌がいいんだよ」

自然と向けられた深緑の双眸に気付いたのか、女将がそう言つて苦笑した。

「そうか？オレには、いつもと変わらないように見えるけどな」

腕の中の瘦身を壊れ物を扱うように慎重に椅子に座らせながらの橋聖の言葉を女将は綺麗に聞き流し、勘弁しておくれという言葉を残して厨房へと続く扉へと消えていった。

対面に座つた橋聖から視線を外した凧は、改めてゆっくりと食堂を見回した。

よくよく観察してみると、地元の間人が大多数を占めているのが判る。皆ここの常連なのか、ここにいる全ての人間がまるで家族であるかのような、陽気で和やかな雰囲気。凧はその深緑の双眸を細めた。

好い町だ。この光景だけで、それが判る。

「待たせたね。この宿自慢の、鹿肉のシチューだよ」

女将の明るい声と共に、テーブルに湯気の立った野菜たっぷりシチューが置かれる。

食欲を誘つシチューに、素直な橋聖の腹が歓声を上げた。

待ってましたとばかりに目を輝かせながら、それでも習慣で胸の前で両手を合わせた彼に倣い、食事に手をつける前に凧も合掌する。胸の前で手を合わせる行為は、彼の出身大陸である孤龍大陸にある食事前の習慣であり、確か、命への感謝を意味していたと記憶している。『民俗学者』である凧には特に遵守する習慣もないので、他の民族の習いを受け入れる事に躊躇いはなかった。

## 第一章 承の舞・12

「にしても。今日はやけに賑やかだな」

当たり障りのない会話を挟みながら食事を続けていた橋聖は、三杯目のシチューを平らげた辺りで未だ騒ぎ続けている中央の集団へと視線を向けた。

「おい、おっさん。タタラのおっさん！」

狭い室内に反響する賑わいに負けじと声を張り上げた橋聖の呼びかけに、馬鹿騒ぎしている集団の一人が顔を向けた。

「なんだ、流れの用心棒じゃねえか。俺に何か用か？」

騒ぎの輪から外れて椅子ごと移動してきた髭面の中年の男性は、明らかに酔っている様子だった。出来上がった茶色の目は、橋聖の対面に座っている風へと向けられ、意味ありげな笑みはその口元に刻まれる。

「橋聖。お前のコレにしちゃあ、随分なべっぴんさんじゃねえか」

小指を上げて茶化してくる酔っ払いに、橋聖はうんざりだという顔をした。推測して、怪我人を連れてきてこの方耳にタコが出来る程聞いてきた言葉なのだろう。

「それはもういいよ。ったく…あの真面目な野菜屋のタタラとアンタが親子だなんて、未だに信じられねえよ」

全く似ていないと皮肉った橋聖に、しかし男は気分を害するどころか豪快に笑った。

「あつはつはつは！まったく！俺みたいな親の元にな〜んであんな出来のいいガキが生まれたのか、今でも不思議でならん！」

「そりゃ、嫁さんの努力だろうさ」

のん兵衛の親父とは違ってしっかり者で芯の強い彼の妻の姿を思い起こして、橋聖は冷めた視線を投げかける。

「そつさ！俺の嫁さんは世界一すげえんだ！」

酒の回っている相手にどんな皮肉も嫌みも通用しないらしい。糠

に釘を打つという感覚はこんな感じなのだろうか、全くもって効果のない戯言の応酬を橋聖は溜め息と共に諦めた。

「で？何をそんなに騒いでいるんだ？」

俺の嫁さんは世界一　などと歌いだした男を当然のように殴ってこちらへと引き戻した橋聖は、騒ぎの理由を尋ねる。

## 第一章 承の舞・13

無断でテーブルに置かれた橋聖のコップを奪い取って中身の水を煽った髭面の中年は、先程とは一変、声を潜めるように顔を近付けてきた。

自然と、二人も紡がれる言葉を聞き逃すまいと身を乗り出す事になる。

「ここだけの話。実はな…新しい脈が見付かってな」

「銀の？」

カツサラは有名な銀山を有する街として発展してきた。故に即座に辿り着いた橋聖の確認に、しかし彼は違う違うと手を振った。

「『源命水』さ」

より一層潜められた声が紡いだ名詞に、凧と橋聖は共に息を呑んだ。

『源命水』。その名の通り、命の源となる水。医師すらも匙を投げるような重篤な病も、その水を飲めばたちまち治ってしまうという。死者すらも生き返らせると言われる、神が人に与え給うた、奇跡の水。

「禁忌の神手…」

これが喜ばずにいられるかと、大笑いする男を傍目に、零れ落ちた声音は凍える氷塊のように冷たかった。

高笑いが、ぴたりと止む。

「…まあ…確かに、嬢ちゃんの言っていることも間違いないやねえんだけどよ」

陽気だった先程とは一転、酔いすらも醒めてしまったのか、ばつが悪そうに男は首に手を遣って弁解する。

命という神域への侵入。神の領域であったはずの生死さえ操る権利を人間に与えた源命水を、ある者は讃え、喜び、希求した。またある者は恐れ、忌み嫌い、生死を操る神の手に触れる禁断の行為だ



として、いつしか源命水は、禁忌の神手とも呼ばれるようになった。  
生きていて欲しい。そう思うことは罪なのか。  
死すら支配する事は、傲慢で、世界の均衡を崩す行為ではないか。  
感情と倫理。

## 第一章 承の舞・14

立ち位置が違う議論に決着などつくはずがない。故に、源命水の取引は、公では認められていなくとも、闇市などでこっそりと売られていた。

だから、源命水の水脈が見付かったなどとおおっぴらには言えないのだ。が、個人間の取引となる闇市に流されるそれは、確かによい金になる。

「風は、道德主義者？」

厭な緊張感が漂い始めた空気をまるで読んでいないかのような軽い調子の橋聖の問いが、止まっていた時間を動かした。

「いいえ」

即座に返された否定に、橋聖だけでなく困ったような顔で落ち着きなく頭を搔いていた男すらも驚きに目を瞪る。

「ただ、これから色々大変だろうな、と思っただけです」

何とも淡々とした的確な指摘に、無駄に入っていた力が一気に抜ける思いがしたのか、男は深い溜め息を吐き出しながら椅子の背に寄り掛かった。

もし彼女が道德主義に立つ否定論者だったならば、今この場で、胡散臭い理屈を並べ立てていかに彼等が行おうとしている事が罪深き行為かを淡々と語って聞かせていたことだろう。

「ま…確かに、色々大変かもな。表向きは新たな銀の鉸脈の発見が、その裏では神酒の密売」

源命水を巡って賛否両論が飛び交う世の中、大声でその名詞を口にするには憚られた。故に、隠語として時折、神酒という言葉を使う。

「こりゃ、発覚したらお縄じゃ済まないな」

首を掻き斬る動作をして見せた橋聖は、何故か楽しそうだった。

他人事だと思いやがってと、事実他人事の橋聖の悪戯小僧のよう

な笑みに捨て台詞のような言葉を残して男は仲間の輪へと戻っていった。

## 第一章 承の舞・15

そんな彼の背をひらひらと手を振って見送った橋聖は、改めてといた様子でテーブルを挟んだ向こう側に座る凧を見た。彼女は既に騒ぎの理由に興味を失くしてしまったのか、残りのシチューを気品さえ感じさせる上品な仕草で口へと運ぶ。

そんな彼女を、頬杖をつきながら橋聖は凝視し続ける。溜め息が洩れたのは、木の皿が空になった頃だった。

「何か訊きたい事でも？」

呆れた様子で、それでも凧は反応してくれる。

「お前、結局どっち派？」

上げられた深緑の双眸を見据え、口元には笑みを残したまま橋聖は尋ねた。

「どちらでもありませんよ。状況によって変わると思っています」

「と、いうと？」

逃げる事を許さない橋聖の追求に、本格的に応える気になったのか、凧は組んだ両手に顎を乗せた。

「死を操る事は、倫理的・道徳的観点から見れば、確かに赦されない事なのかもしれません。ですが、もし、自身に誰かを失うような状況が訪れ、尚且つそれを回避する方法があるのなら、それを選択するでしょうね」

「なんとも、優等生の回答」

詰まらなそうに肩を竦める橋聖。

「私もそう思いますよ」

皮肉を含んだ相槌にお前はどうか思っているのかぐらいの抵抗が返ってくるかと思っていた橋聖は、あっさりとしてそれを認めた凧に瞬きを数回繰り返した。が、それも数秒で、頬杖をつく腕を換えれば、刻まれる勝気な笑み。

「俺さ。そういうさっぱりした性格、好き」

恐らく八割程度の割合で愛の告白だと受け取られかねない台詞を  
面と向かって言われた凧は、穏やかに微笑んだ。

「嫌われなくてよかったです」

「嫌われるのは御免？」

「悪意より好意の方が嬉しいですね」

「違うない」

愉快そうに笑う橋聖と凧の、何処か道化じみた会話は喧騒に紛れ  
て誰にも届かない。

## 第一章 承の舞・16

「じゃあ、お前もオレを嫌わないでいてくれてるってわけだ」

「嫌う要素が何処かにありましたか？」

遠回しな肯定に、彼女と出会ってからの数時間の記憶を遡った橋聖は軽く肩を竦めた。

確かに、今の所、互いに嫌う要素は何処にもない。

「ただ、警戒を解くのは止めておいた方がいいと思います」

「…ふん？」

釘をさしてきた相手に、真意を問うような視線を投げかける。口元は組んだ両手に隠されて見えなかったが、交わった深緑の双眸は鋭い輝きを収めていなかった。

小さなテーブルを挟んで繰り広げられる小さな冷戦。どちらも口元を手で隠し、読み取れる情報は交錯させた瞳からのみ。

それでも、互いに気付いていることだろう。相手の唇に刻まれる、何処か試すかのような、冷えた笑みに。

壁に掛けられた古ぼけた時計の秒針が時を刻む毎に、二人の間に流れる空気が緊張を帯びていく。足を組み替えるといった、ほんの些細な出来事で壊れてしまうような脆い硝子細工のような冷戦はしかし、入り口の扉が乱暴に開けられる音によってあっさりと終わりを告げてしまった。

## 第一章 承の舞・17

「橋聖ッ！」

扉が開くと同時に室内に響き渡った呼び声に、同時に動かされる湖底と炎。

「橋聖！アンタ、あたしの汗と涙の結晶である華蘭からんと無駄にしたんだって！？」

宿屋となつて二階に続く階段の傍ら、店の最奥に橋聖の姿を認めたそばかすの少女は、怒り心頭といった体で賑やかな室内を大股で歩いてきた。

「あれを作るまでにどれだけの工程があると思っっているの！？五回や六回じゃないんだよ！」

橋聖の前に仁王立ちするや否や、その顔面に指先を突きつけて矢継ぎ早に言葉を投げつける少女。

「茹でて、蒸して、乾かして、潰して、濾して…その他色んな苦労を重ねてやっとあの香水は出来上がるの。それを…たかが一人の女の為に無駄にしたらだって？」

噂というものは案外早く伝わるものらしい。それが顔が広い相手に関したものであれば口にする人数も多いというもので、尾ひれ背びれが付いた噂は、果たして今では何処まで広がっている事やら。

「ふざけるんじゃないよッ！その女、ここに連れておいで！」

文句の一つでも言っつてやらないと気が済まない、怒りに任せて喚き散らす相手に、この分だと町外れの婆さんまで知っつていそうだなあ、などと内心で苦笑していた橋聖は、恐る恐るといった様子で指差した。

「アゲハ。もう、いる」

「ええ！？」

怒鳴りつけていた勢いそのまま橋聖の示す方へと顔を向けたアゲハは、文句を言おうとした状態のまま固まった。

目の前で繰り広げられる一方的な罵倒劇を見守っていた深緑の双眸。深い知性を感じさせる宝石のような瞳には、問うように小首を傾げた凧の頬を金髪が撫でる様子に頬を染める様子のアゲハの姿が映っていた。



第一章 承の舞・18

無言で見つめ合う凧とアゲ八を交互に眺めていた橋聖は、ああと納得したように茶色の髪を掻く。

これは、あれだ。所謂、一目惚れ、というやつ。

「あの…」

「ごめんなさい！さっきのあたしはどうかしてたんです！」

猪突猛進が性格なのか、顔を仄かに赤く染めたアゲ八は、凧の手をがしつと掴んだ。

「ですが、香水を…」

「ああああ…ッ。そんなことは全然気にしなくていいです！寧ろ忘れてくださいッ」

恥ずかしいと、離れた両手で頬を挟んで背を向けるアゲ八に、凧の困惑は増すばかりだ。彼女はどうしたのかと、現状の説明を求めて視線を遣った先では、ただ肩を竦められただけだった。

「お姉さん、この街は初めて!？」

対応に困っている凧を無視して、というよりも全く気付いていない様子のアゲ八は、テーブルに両手をついて顔を覗き込んできた。

その勢いに些か仰け反った体で、凧は頷く。ぱっと花が咲いたような明るい笑顔を浮かべ、曲げていた体身体を起こしたアゲ八の嬉しそうな様子に、その深緑の双眸が瞬かれた。

「じゃあ、明日、あたしが案内してあげる！地元の人しか知らないような香水のお店とか、お洒落な髪飾りお店とか。ね？いいでしょう?？」

その大きな黒い瞳を輝かせて尋ねてくる様子に、千切れんばかりに尻尾を振る子犬の姿が重なって見えた凧は、困惑の表情を一変、軽く声を上げて笑った。

「ええ。是非、お願いします」

穏やかな微笑みと共に返された了承に、アゲ八は顔を輝かせる。

明日の十時にここに迎えるに来るからと一方的に言い置いて、彼女は嵐の如く去っていった。

嵐が去り、中央のテーブルの喧騒も飲み潰れ始めたのか若干静まり、結果的に落ち着いた雰囲気を取り戻した室内で互いに顔を見合わせた凧と橋聖は、どちらからともなく笑い声を上げた。

「猪みたいな奴だろ？」

「元気なのはいいことですよ」

直球勝負の彼を宥めるように苦笑へと変えた凧は、けれどその返答は暗に橋聖の言葉を肯定している。

「元気すぎるのも考えものだと思うけどな。ありゃあ、明日、連れ回されるぞ」

「ご愁傷様と、片手をひらひらと振る橋聖には全くもって誠意がない。」

元より凧も期待していなかったようで、楽しんできますよと曖昧な相槌を打って立ち上がった。

「行くのか？」

「ええ。宿はとってあるので。お代は…」

「いいよ、凧」

「この食事代とその他諸々の代金はどうすればいいのかという凧の問いに応えたのは、橋聖ではなく丁度厨房から出てきた女将だった。」

「ですが…」

「気にしなくていいよ、凧。明日、アゲハに一日付き合ってくれとお礼って事で」

陽気に笑う女将に、凧は言葉に甘える事にした。お礼の言葉と共に深い一礼をすれば、そんなにかしこまらなくてもいいと怪我をしていない方の肩を叩かれる。その力が想像以上に強く、頭を下げたまま凧は片目を瞑った。

「さて。おい、こら。そこの飲んだくれ共！寝るんだったら自分家で寝な」

どうやら厨房から出てきた本当の目的は、中央を陣取っている炭鉱労働者の団体を追いやる為だったらしい。女将の張りのある催促を背に聞きながら、凧は未だ座ったままの橋聖へと最上級の礼をとった。

「助けてくださり、有難うございました」

「あ…いや…」

胸の前で手を組んだ最敬礼に、橋聖は思わず立ち上がっていた。背筋を伸ばし、慣れない様子ながらもお辞儀を返してくる。

「紡がれし糸が交わったなら、また」

そんな彼に柔らかな微笑みと再会を願う言葉を残し、凧は踵を返す。

「またおいで、凧」

背中を追ってきた女将の優しさに頷きを返し、凧は外に出た。見上げた空は朔の日の為にその夜天の支配者を欠き、瞬く星々は足元を照らす光としては些か頼りない。それでも暗闇に慣れてしまえば歩けない程の闇ではなく、所々から洩れてくる民家の灯りも手伝つて、崖越しに微かに聞こえてくる喧騒に笑みを零した凧は、危ない足取りで今夜の宿と決めた建物へと向かって歩き始めた。

「結良」

昼間は旅人や商人、地元人で賑わう表通りも、自然の摂理に従って眠りに入る夜は行き交う影はなく、何処か寂寥感すら漂う夜の世界を歩きながら、凧は呼びかける。

「聞いていた？」

『…源命水。荒れるぞ、この街は』

耳元で返された的確な指摘に、いつの間にか姿を現した猫の白い

毛を優しく撫でた。

## 第一章 承の舞・21

「既に、その兆候はあつたからね」

月が姿を隠す今宵は、数歩先の闇すら見通せない。それがまるで人間の生き方を象徴しているかのようで、凧はその深緑の双眸を細めた。

「紛れ込んでいるなんて、彼等は思いもしないでしょうね」

夜闇に虚しく響く自らの足音を聞きながら、凧は今日の出来事を思い出す。

興味半分で立ち寄った街だった。特に興味を惹かれるような伝承もない、ありふれた街。最初は、そんな印象だった。

だが、街に入るなりそれが一変した。活気溢れる陽気な気配の片隅に、まるで隠れるようにして存在する、けれど決して掻き消す事の叶わない異質な気配があつた。

それは、敢えて人気のない路地裏へと入った瞬間に確信へと変わった。足音もなく、女一人を取り囲んだ影。

「彼等の目的は何だと思う？」

民俗学者は各地に残る伝承や言い伝えを研究し、そこから闇に埋もれし歴史を紐解こうとする。この世界に散らばった過去の欠片を拾い集め、その全てを合わせた時、そこに現れるものは果たして、何を語るのか。

「幻の都とされる『天元郷』<sup>てんげんきょう</sup>と、空白の百年」

未だ解き明かされていない歴史の中で、その全貌が謎とされる最大の闇。空白の百年と呼ばれる、歴史書より消された記憶と、それ以前の書物には必ずといっていい程登場していながら、空白の百年よりも後のものからは完全に姿を消した、幻の都。

歴史上最大の謎を追う旅の中で、彼等は時折姿を現した。まるでこちらが真実に近づく事を阻むかのように、問答無用で襲い掛かってくる。時には、今日のように、自らの命を投げ出す事すら厭わな

い。

背後に、大きな集団がいる。それを、今日、確信した。でなければ、躊躇いもなく命を投げ出すなどという洗脳が出来るはずがない。

「恐ろしい相手。何故、私を狙う？」

『凧…』

心配げに頬を舐めてきた結良の頭を、凧は大丈夫だと撫でてやる。命を狙われること自体が怖いわけではない。ただ、まるで霧を掴むかのような、障子に映る影を見ているような、そんな不確かな感覚が不気味なだけだ。

彼等が自分と同じ歴史を追っている事は明白だ。だが、何故自分を狙う？ 辿り着くその先に、知られてはならぬ真実が待っているとしてもいいのか。

「それに、橋聖と名乗ったあの青年…」

どんな幻術を使ったのかは判らない。この世界に起こる全ての事象を理解出来るなどという認識は傲慢以外の何物でもなく、だから生じたそれがどんなに現実離れしたものであったとしても驚きはない。切り取られた世界。

だが、彼はそれに気付いた。誰もが認知出来なかった路地での出来事に、唯一人、異国の青年が介入してきた。

「果たして彼は、敵か味方か…」

まるで悪戯っ子がそのまま成長したかのような、自分に正直でありながら、それでも何処かすれたような気配を纏った青年。燃えるような炎の瞳は決して警戒を解くことはなく、軽い言葉の応酬の端々から自らの助けた女の情報を得ようとしていた。

警戒を解くなと忠告したのは、こちらの最終的な決定を伝える為。あれは、牽制だ。

この命を狩りたいのなら、狩られる覚悟で来い。

「ああ…ここは、星が綺麗なのですな」

目的の宿屋の扉の前で足を止め、改めて空を見上げた凧は今更ながらにその美しさに気付いて感嘆の溜め息をつく。



『凧。冷えてきた。夜風は傷に響く』

しばらくの間夜の世界に瞬く星を見上げる横顔を眺めていた結良の催促に、凧は素直に従った。

「いずれ、答えは見つかる」

胸中に渦巻く疑問に無理矢理結論を付けて意識の片隅に追いやり、凧は取っ手に手を掛ける。夜の世界を金髪が流れ、姿の消えた扉が静かに閉じられた。

\*\*\*

## 第一章 転の舞

「疲れた？」

頭上から降ってきた心配そうな声に、凧は顔を上げた。視界に入った情けない顔に、緩やかに首を横に振る。

「ごめんなさい。あたし、突っ走る癖があつて……」

それでいつも親に叱られるのだと、石垣の隣に腰掛けてきたアゲハは舌を小さく出して肩を竦めた。

「何かに夢中になれるというのはよい事ですよ」

昼下がり。今日も今日とて街の中心地は大勢の人々に賑わい、昨日の夜の静けさが嘘であるかのようだ。

そんな喧騒の片隅の石垣に座り、凧は午前中のアゲハの行動を思い出す。

手作りの美しい髪飾りの店。宝石をちりばめた装飾品を取り扱う店。硝子細工の工房。その他諸々。

はつきり言つてあれは案内と言うよりも連れ回されたと言う方が正しい表現だったが、それでも、棚に並べられた品々を眺め、硝子細工の作り方を教わる横顔は好奇心に輝いていて、美しいと思つた。「母さんは、そんな事よりも家事を覚えなさいつて言うし、父さんは……好奇心なんて必要ないつて、いつも言うの」

地に着かない足を揺らす不貞腐れた様子に、凧は取り敢えず彼女の言葉を全て聞こうと沈黙を守る。

「あたしね、本当は歴史に凄く興味があるの」

思つてもみない言葉が耳に届き、凧は興味深そうに伏せていた瞼を上げた。

「本当なら、香草を売るよりも、世界各地に伝わる伝承を聞いて歩きたい。時の闇に埋もれてしまった歴史に光を当てて、それを解き明かしたいの」

でも、と。天に輝く日輪のように輝いていた顔が、俯くと同時に

鬘りを帯びる。

「母さんと父さんは、そんなあたしの願いに耳を貸そうとはしてくれない。馬鹿な事言ったって…そればかり」

## 第一章 転の舞・2

深い溜め息をつくアゲハに優しげな微笑を浮かべた凧は、そつとその綺麗な赤毛を撫でた

「愛されている証拠ですよ」

自分を見上げてくる顔に浮かぶ情動が、驚きから怪訝へと変化する。

「旅というものは、常に危険と隣り合わせのもの」

世界は広い。五つに分かれている大陸は中央に位置する神鳥大陸を頂点とする結束を誓い、造船技術の発展に伴う貿易の活発化によって人々の従来も身近なものになったとはいえ、辺境では未だに余所者を拒絶する地方も多い。奇異な視線を向けられ、避けられるのならばまだいい方だ。下手をすれば、命を狙われる事もある。

「そんな危険な旅に、喜んで送り出す親がいると思いますか？」

問うように小首を傾げ、諭すように凧は言葉を続ける。

「無事に育って欲しいから、親元で生きるように言っ。愛しているからこそ、安定を願うのですよ」

そばかすの散った頬を指先でつつけば、照れたようにアゲハは顔を背ける。それでも赤毛を撫でる手を跳ね除けなかったのは、少しでもこちらの言葉が相手に届いた証拠だと思ってもいいのだろう。

「…凧は、自由じゃない」

しばしの沈黙を破って届いた呟きに、凧は動きを止める。

「望めば何処へだって行ける。空を渡っていく鳥のように。でも、あたしは…」

語られなかった言葉の続きはどのようなものだったのだろうか。

顔を伏せたまま再び口を噤んでしまったアゲハの赤毛から手を離れた凧は、決して追及しなかった。青空を見上げれば、名も知らぬ鳥が数羽、空を翔けていくところだった。

籠の鳥、とでも、彼女は言いたかったのだろうか、その姿を見て漠然と思う。

## 第一章 転の舞・3

地に縛られて生きる者。他の世界を見ることの叶わぬ者。

彼等にとつては、大陸間を自由に行き来し、多くの世界を見ることの叶う旅人は、空を勝手気ままに飛び回る鳥のように自由に見えたことだろう。

しかし、彼等は同時に知っているだろうか。それは即ち、安住の地がないに等しいのだという事を。

帰るべき場所がない。故に、その死を悲しむ者もまた、いないのだ。

お帰りと、迎えてくれる笑顔がある。

その温もりが、旅人である自分には羨ましい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

結局は、ないものねだり。どちらもその苦しみを知らないからこそ、羨み、望むのだ。

「：今まで聞いた伝承を、話して聞かせましょうか？」

だから、旅人も辛いのだとは言わない。どんなに言って聞かせても、それはただの御伽噺でしかないから。

「本当……？」

見上げてきた瞳は涙で濡れ、震える声音が真を問う。

「本当に、聞かせてくれる？」

「ええ。時間が許す限り」

穏やかに微笑み、凧は頷く。

悲しみが歓喜へと塗り換わっていく。涙を拭ったアゲハは、恥ずかしげに笑った。勢いをつけて石垣から飛び降り、急かすように凧の手を取る。

「じゃあ、お昼食べたらあたしの家に行こう。そこで、いっぱい、いっぱい話して。遠い遠い地の、物語を」

## 第一章 転の舞・4

手を引つ張つてくるアゲハに半ば引きずられる形で足を進めた凧の深緑の双眸が、ちらりと、背後を一瞥する。その瞳が宿す警戒の光は視線が前方へ戻されると同時に掻き消え、お薦めだという店の前でようやく凧はアゲハの手から解放された。

「ここは、昨日の…」

「そ。女将さんの手料理食べちゃったら、他の所じゃもう満足しないよ。」

それ程に美味しいのだと笑い、扉を開けて中に入ろうとしたアゲハの背を凧は呼び止めた。

「ごめんなさい。先に行つていてください。どうやら、忘れ物をしてきてしまったみたいです。」

「え？あたしも一緒に行こうか？」

「大丈夫。見当はついていきますから。」

すぐに戻つてくると言い置いて、凧は心配そうなアゲハに片手を上げて来た道に戻った。少し進んだ所で背後を振り返り、彼女が店の中へと入った事を確認する。

「結良」

呼びかければ、即座に左肩に温もりと重さを感じる。

「何人だと思う？」

「十…いや、十二か」

先程からずっとこちらの後をつけてきている気配の人数に、凧は軽く肩を竦めた。雑踏の中をゆっくりと歩きながら、肩に乗った白い猫と不自然に思われない程度の音量で会話を続ける。

「確か…近くに池があったと記憶しているけれど」

「そこを曲がった先に」

結良の案内に従い、凧は大通りから外れた一本の路地へと入る。歩く距離が長くなるにつれて民家はまばらになり、視界を緑が埋め

るようになれば、小さな森林の中へと入った事を教えてくれる。

恐らく、真夏の水不足や森林火災に備えて人工的に造られたのだろう。申し訳程度の柵で囲まれている池の畔で凧は足を止めた。緩慢な動作で背後を振り返れば、結良の指摘通り、十二の影がそこにいた。



## 第一章 転の舞・5

「やれやれ……。これでは、観光もままならない」

腕を組み、盛大に溜め息をついた凧からは緊張というものが見受けられない。黒装束に身を包んだ十二の刺客達は既に己の得物の切っ先をこちらに向けているというのに、彼女は決して焦る気配を見せなかった。

湖底の瞳がゆっくりと影達を眺め遣り、しばし、互いに相手の出方を窺うような沈黙が落ちる。が、それも刹那の間。脆い均衡を崩したのは、果たして何であったのか。

微かに砂利を踏み締める音が響き、頭上を仰ぎ見た深緑の双眸が陽光を弾く刃の眩しさに細められる。振り下ろされた短剣はしかし、標的を捕らえることは叶わなかった。

風もないのに波紋を刻んだ池から、突如として水の龍が出現する。それはまるで何かの意志に導かれるかのように空を切り、十二の影の動きを封じた。

「正当防衛。だから、謝罪はしませんよ」

自らの体に巻き付く水龍に為す術もない刺客達へと、凧は穏やかな微笑みを向ける。組んでいた腕をほどき、軽く掲げられた右手が握り締められた。

呻き声一つ上げること叶わず、巻き付かれた水龍の圧迫により潰されるその体躯。鮮血は水に溶けて周囲に飛び散る事はなく、水龍が霧散すれば躯が地に落ちる鈍い音がする。既にそれが何であったのかわからない、ただの肉塊へと姿を変えたそれから流れ出す大量の血が、所々に出来た水溜りを赤く染め上げた。

『その力に頼らなくとも、お前の力量ならば腰の短剣一つで殺せただろうに』

「返り血を浴びたくなかったものだから」

忘れ物を取りに行き、血に染まった姿で戻ったら怪しまれるだろ

うと、無造作に散らばる肉の塊を避けるようにして風は街へと足を向ける。

『けれど、その力は…』

「この程度なら大丈夫ですよ、結良。体に影響はない」

諫めの言葉を遮れば、不貞腐れたように左肩に結良は丸くなってしまった。揺れる二本の尻尾が頬を叩き、無言の抗議に風は苦笑を浮かべる。

本当に大丈夫だと、細い指が柔らかい毛を撫でる。それでも結良の機嫌は直る気配はなく、諦観した風は時の流れに解決を委ねた。

## 第一章 転の舞・6

「何かあったのでしょいか」

路地裏から出た大通りの様子がおかしい。人の流れは停滞し、近くの数人と言葉を交わし合う人々の顔に浮かぶのは、焦燥と不安の念だった。

「凧！」

ただよらぬざわめきを縫って届いた呼び声に視線を遣れば、血相を変えて走ってくるアゲ八の姿を捉えた。

「アゲ八。何かあったのですか？」

抱きついてきたアゲ八を危なげなく受け止めた凧がこの異様な空気の原因を問えば、見上げてきた黒の瞳には涙が浮かんでいた。

「さつき、また地震があつた！」

「地震？」

訝しげに凧は眉を寄せる。

確かに自分がいた場所は市街地よりも多少距離があるとはいえ、大地の怒りから逃れることなど可能なのだろうか。

「それで、炭鉱の方で何かあつたらしいんだ。助けを求めに来た鉱山労働者の人の話を伝え聞いたんだけど、地震で岩が崩れて沢山の負傷者が出てるって……」

余程恐ろしい思いをしたのか、アゲ八は抱きついたまま離れようとしない。

「父さんが……あそこで働いているのに……」

言いようのない不安と緊張が漂う通りを眺めていた凧は、涙声が発した言葉に震える華奢な肩にそっと手を置いた。

「わかりました。様子を見てきます」

「なら、あたしも……」

勢いよく顔を上げたアゲ八の唇に人差し指を当て、首を横に振る。「アゲ八はお母さんの傍に」

支えてあげると、不服そうに口を開きかけたアゲ八に対して先手を打てば、不承不承といった体ながら彼女は離れてくれる。赤毛を優しく撫で、凧は銀鉾山へと向かって走った。

## 第一章 転の舞・7

恐らく震源地は鉱山近くの地中だったのだろう。事故現場へと近付くにつれて崩壊した家々が目立ち始め、道路に散乱した石の欠片などを避けて通る為に、どうしても進む速度は遅くなる。住宅地を抜けて山道に入っても倒れた木々やら転がり落ちてきた岩などが行く手を阻み、傾斜も手伝って風の歩みは更に緩いものとなった。

聞こえ始めた人の話し声が目指す場所が近い事を知らせてくれる。足場の悪い坂道を登り終えた先に広がった光景に、風は思わず足を止めていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

大地が赤いのは、含有物によるものだろう。平らな赤い大地の向こうに聳える鉱山には立派な入口が設けられ、トロツコが通る線路も完備されていた。

しかし、そこから運び出されてくるのは、この地の特産である銀鉱石ではなく、血塗れの人間だ。

「死の臭い……」

怒号が行き交うこの場に漂う独特な臭いに、風は不愉快そうに眉間に皺を刻む。

岩の崩れ落ちた薄暗い坑道で、一体どれだけの命が奪われたのか。消え逝くこうとしている命の灯は、いくつ守れる。

「……結良。感じますか？」

悲しみと痛みと死の気配が充満する世界に紛れ込んだ、異質な気配を。

『……源命水の水脈がある所に』

「案内を」

肩から地に飛び降りて歩き始めた結良の行動が了承を示し、風はその後に続いて坑道の入り口へと近付いていく。泥に汚れた男達は皆負傷者の運び出しや治療に専念していて、その場には不釣り合い

な女と猫一匹に構う者など皆無だった。

閉塞感を与える坑道内は、等間隔に吊るされたランプの灯りで辛うじて周囲を視認できる程度だった。それでも闇に慣れた視界には充分な明度であり、まるで蟻の巣の中のように縦横無尽に掘り進められた道の一つを結良の案内に従って奥へ奥へと進んでいく。

## 第一章 転の舞・8

危なげなく進められていた足が、微かに耳に届いた音に止まる。坑道内に反響していた自らの足音が掻き消えれば静寂に包まれ、より明瞭になったそれが聞き間違いでない事は明白だった。

腰の後ろに差した短剣の柄に手を遣りながら、凧は背後から近付いてくる誰かの足音に神経を集中させる。恐らくランタンでも持っているのだろう、蛇行した道から淡い光が洩れ見えた瞬間、凧は剣を抜いていた。

「あれ？凧？」

聞き覚えのある声と、次いで灯りの中に照らし出された顔に、凧は振り上げかけていた手を止める。

「何でここに……って、随分と物騒なもん持つてんだな」

驚きに瞳られていた赤の瞳が凧の手に持たれている短剣を映し出し、その口端に苦い笑みが刻まれた。

「あ……これは、護身用に」

「俺は不審者か」

「警戒しておくに越したことはないかと」

近付いてきた正体不明な足音が見知った人物のものであると判明して尚、凧は短剣を鞘に収めようとはしなかった。

「間違いがあったらどうするんだよ」

「自分の命には代えられません」

生きていてなんぼだと悪びれもなく言い切る凧に、橋聖は浮かべた苦笑を更に深いものにした。

本当に、淡泊な性格をしていると思う。ここまで自己保身に走られれば、寧ろ気持ちがいいというものだ。

## 第一章 転の舞・9

「で、改めて。ここで、何を？」

警戒はお互い様。苦笑を浮かべながらも鋭さを増した赤の双眸に気分を害するなど自分勝手にも程がある。

「アゲハの父親がここで働いていると聞きました。心配していたようですので、様子を見に来ました」

答えはここへ来た目的の一部分でしかないが、説明に嘘はない。

「ああ…それなら大丈夫だ。ダルミのおっちゃんは無事さ。丁度トロッコを外に運び終えた直後に地震があつたからな」

外で怪我人の看病をしていると言う橋聖に、凧は一つの心配事が解決された事に取り敢えず安堵の溜め息をついた。軽く伏せられた深緑の双眸は、しかしすぐに目の前に立つ青年へと向けられる。

「貴方は、何故ここへ？」

彼が用心棒まがいの事を生業にしている事はアゲハから聞いている。炭鉱の一体何処に、命を狙われる危険があるというのか。それとも、彼の警護には、崩れ落ちる岩から人間を守るといふ項目まで含まれているとでもいうのだろうか。

不信任を隠しもしない凧の質問に、橋聖は肩を竦めて見せた。数秒宙を彷徨った視線は、観念の溜め息が洩れると同時に凧へと戻される。

「呼ばれた …… って言つて、信じる？」

軽い口調でありながら、その声音からは嘘をついているようには思えなかった。そもそも、この状況で戯言を口にする程彼は馬鹿ではないだろう。

「呼ばれた…？」

鸚鵡返しは、返された返答の真偽を問うようなものではない。訝しげな呟きのその疑問は別のところにある。



## 第一章 転の舞・10

「貴方は…」

何かを確認しようとして洩れた言葉は、しかし尻切れ蜻蛉となる。聴覚が捉えた空を切る音に、無意識のうちに凧は膝を折っていた。その頭上を、鋭い刃が数本通り過ぎていく。

背を向けていた凧よりも視界があけていた橋聖もほぼ同時に頭を低くし、結果として滑空したそれ等は近くの壁へと突き刺さる。

「ダガー？」

体勢を整えた橋聖の掲げたランタンの光が、壁に突き刺さった物を照らし出す。

「命を狙われる覚えは？」

闇から投げられた数本のダガーが狙ったのは、果たしてどちらなのか。

「貴方は？」

軽く肩を竦める動作は肯定を表し、凧は逆に問い返す。

「ま…こんな仕事をしていれば、一つや二つ」

命を狙われて取り乱すような繊細な精神など持つていては旅などしてられない。

平然とした様子の返答から凧が導き出した答えは、どうやら相手も同じであるようだった。

「じゃあ…ここは一旦、休戦って事で」

「異議はありませんね」

短い遣り取りで、互いに過度の警戒心を解く。

一時休戦。取り敢えず、この先にわだかまる闇に潜む敵を倒すまでは味方だ。それでも、片隅に僅かな緊張を残しておくことを忘れないのは、どうやらお互い様のようだった。

侮れない相手だと、互いに同じ思いを抱く。

## 第一章 転の舞・11

「確か、この先は神酒の水脈に繋がっているはずだけど」

「ならば、密売者でしょうか」

橋聖の持つランタンの灯りを頼りに二人は並んで歩く。

既に向こうにこちらの存在は知らされているのだから、闇に気配を隠して近付くなど意味はない。前方を照らすことによって視野を広め、暗闇である背後へ向ける注意量をより多くしておいた方が利口な遣り方だった。

「それ、本気で言ってる？」

「いいえ」

交わされる戯言は、果たして未だ見えぬ敵への圧力か。何処かとぼけたような、緊張感に欠ける二人の行動は、こちらの様子を窺う相手の判断を狂わせるだろう。

緊張感がないのは、腕が立つ証拠か。ただ、相手の力量を把握しきれしていない凡人ゆえか。

先を行っていた結良の白い体が動きを止める。自然と歩みを止めた風の肩へと、助走をつけた猫は飛び乗ってきた。

「これが…源命水」

実物を見るのは初めてなのか、橋聖は目の前に広がる光景に微妙に息を呑んだ。

天井に空いた穴は、月の力が強い夜ならば洞窟全体を照らし出すだけの光を取り込むだろう。今まで通ってきた坑道に比べて明らかに備え付けられた松明の数は多く、揺れ動く赤き炎を、鏡のような地底湖の水面は鮮明に映し出していた。

洞窟内を満たすのは、独特な甘い匂い。それが、目の前にある地底湖を満たすものが、ただの水でない事を語ってくれる。

## 第一章 転の舞・12

「 来たか」

何処からともなく響き渡った声に、鳥肌が立つ。悪寒が背中を走り、凧と橋聖は即座に極度の緊張を纏った。

カンテラを置き、抜き放ったナイフを構える橋聖と既に短剣を抜いていた凧が背中合わせの陣を取る。何処から攻撃されても対処出来るよう、色の違う二つの瞳が油断なく橙色の空間に横たわる闇を見据える。

「凧。熱狂的な崇拝者に心当たりは？」

「生憎、行き過ぎた恋愛感情を向けられるような友好は持ち合わせていませんよ。全て、健全なる関係です」

背後から飛んだ戯言に、こちらも戯言で返す。

「橋聖。貴方こそ、熱烈で歪な恋愛関係に覚えは？」

「悲しい事に。俺、そこまでモテない」

互いにストーリーカー説を退ける。

「それはよい事で」

「モテないのに？」

「尾を引きませんから」

「成る程：確かに」

互いに面識がないのなら、ここで殺しても後の問題は発生しないと言つ凧に同意しながら、橋聖は背中合わせの温もりに一抹の恐れを抱く。

命を奪う事に対して、こうまで人間は、淡白で容赦なく、冷酷になれるものだろうか。

## 第一章 転の舞・13

「来ますよ」

光の傍らに寄り添う闇がざわめく。

恐らく、動いたのは同時だろう。空を切って飛んでくる鋭い刃をかわし、時には手に持った得物で叩き落としながら、襲い掛かってくる影達へと銀の軌跡が描かれた。

二人共、相手に情けを掛けるなどという甘い考えなど持ち合わせていない。故に、繰り出される攻撃は全て、生命活動を完全に停止させるもの。

頸動脈を掻き斬り、舞い散る鮮血を横目に体を反転させると同時に背後の敵の心臓へと刃を突き立てる。崩れ落ちてきた体は別の敵が振り下ろした剣を受け止め、斬り裂いた喉元から噴き出した血が自らに掛かるのさえを防いでくれる盾と成り代わった。

決着がつくまでの所要時間は、この人数相手にしては確実に早い方だっただろう。殺気が消え失せたのを確認した凧は、鮮血を滴らせた短剣を片手に湖の傍らで動きを止めた。反響した水音が、それが共に闘っていた彼のものではない事を願う。

「凧。お前、何人殺った？」

どうやら無駄な心配だったようで、少し離れた所で手を振ってくる橋聖の姿を認めた凧は、幽かな笑みを洩らした。

「十五人程」

「残念。俺、十七」

勝った！とガッツポーズする橋聖に、二人しか違わないという言葉は胸の中に仕舞っておく。

「さて」

浮かれた気分はほんの刹那の時間。

「そろそろ、顔を見せてもいい頃だと思っただけど？」

深緑と赤の双眸が、波紋一つ立たない静かな湖へと向けられる。

薄暗い空間を油断なく見つめる先で、しばしの沈黙を破り、やがて一つの影が暗闇から姿を現した。

## 第一章 転の舞・14

頭から闇色の外套を被り、辛うじて認識出来る違う色は歩みを進める足の肌色のみ。その裸足は、どういふからくりか、湖面を踏み締めていた。

「あいつ…幽霊かな」

どうにも緊張感に欠ける言葉は、どうやら本気で言っているようだった。

「さあ、どうでしょう。殺してみたら判ると思いますが」

「死ねば生身の人間？」

空恐ろしい事を言つと、肩を竦める橋聖の言葉に被るようにして低い笑い声が空気を震わせた。それは心底この状況を楽しんでいるもので、耳から入ってくる嘲笑が悪寒となつて全身を駆け巡る。

「何かすつげー笑われてんだけど…俺達、これで食べていけるかな」  
「道化師と呼ばれても平気なら、或いは」

視線は湖の中央で足を止めた影へと固定したままで、交わされる狂言は、自らの中にわだかまる薄気味悪い恐怖を紛れさせる為か。

「あ…無理無理。俺、馬鹿にされるのつて大っ嫌い」

「奇遇ですね。私もです」

視線の交錯は一瞬。動いたのは橋聖だった。

投げられたナイフが滑空する。それは寸分の狂いもなく、未だ静かに笑い続けている外套へと吸い込まれていった。

響き渡っていた嘲笑が止み、静寂が戻ってきたのはほんの数秒。再び笑い声が洩れ、異様に白い指から先程橋聖が投げたナイフが零れ落ちる。粘着質のある水音が一度。

「無駄だ」

耳朶を打った声は、一瞬にしてこちらの余裕を奪い去つたもの。

「このような玩具では、我は殺せぬ」

## 第一章 転の舞・15

「…って事は、幽霊説は消えたって訳だな」

そこに安堵の感情を読み取ったのか、湖に佇む影の視線が橋聖に動いたような気がした。全てが影に埋もれ、彼を捉えているだろう瞳すらもこちらからは視認出来ない。

「殺せるんだったら、恐怖を抱く理由がない」

これが幽霊か何かだったら、対処の方法が判らなかつた。一度死んでいるものを、どうやってもう一度殺す？

恐ろしいのは、ただ、自分の身に降りかかる災厄を退ける術が無に等しい状況のみ。

「ほう…？我を殺すと？」

「状況によつては、だな」

殺される前に、殺す。

そう答えた橋聖に、三度響き渡った<sup>みたひ</sup>楽しげな笑い声。

「単純明快で結構。だが…死ぬのはお前達だ」

洞窟内に生暖かい風が吹き荒れる。掻き消されまいと必死に耐える炎が作る歪な陰影が、まるで二人を嘲笑う人影のようだった。湖が反射する淡い橙色の光ですら、目を射るようで煩わしい。

闇が、その気配を増す。煽られる篝火は熱を発生させているはずなのに、確実に気温が下がった。肌から侵入してくる寒気が、決して自然界の変化に反応した生理現象だけではない事を、二人は否定しない。

感じる。目の前に佇む、静かな影が発する、狂気なまでの純粹な殺意を。

## 第一章 転の舞・16

「何故、命を狙うのです？」

発される静かなる殺気にも臆する事無く、凧は問う。

「失われた歴史の先に、隠しておきたい秘め事でも？」

動かされた視線。闇色に塗りつぶされたそこから自らを射抜く視線を、凧は真つ向から受け止めた。

話が解らずに怪訝そうな視線を送ってくる橋聖はひとまず無視を決め、双方、睨み合ったまま沈黙を守り続ける。

「何の話やら……」

「天元郷に関係があるのでは？」

逃げる事は許さない。

闇から読み取れる情報など一つもなく、それでも、世界を包み込む暗き気配に、微かに動揺が走ったような気がした。

「何故、私の進む先に、貴方達は現れる」

感じ取った僅かな隙に追い討ちをかけるかのように、凧は詰問を重ねる。

「何故、橋聖をここへ呼んだ？」

命を狙われる理由。空白の百年を解き明かそうとする民俗学者であるからというのが、恐らく自分のもの。

今までの会話を理解していない様子からして、橋聖は天元郷の事も空白の百年の事も恐らく知らない。

ならば、何故、彼の命を狙う必要がある？

「凧？」

全くもって話が見えない様子の訝しげな呼びかけに、凧は応えない。全神経を、中央に佇む影へと集中させる。

全てが闇に覆われた者。世界を構築するその闇に生じるどんな僅かな変化すら見逃さず、読み解く民俗学者の鋭い眸が、相手を射抜く。



「知る必要はない」  
返されたのは、完全なる拒絶だった。

## 第一章 転の舞・17

元より素直に答えを貰えると思っていなかった凧は、手に持ったままだった短剣の柄を握り締める。

戦闘態勢に入ろうとした彼女の耳に、嘲笑と共にそれは飛び込んできた。

「お前達は、ここで死ぬと言ったであろう」

言葉の終わりと同時に響いた、水の中から何かが姿を現した音。

「凧ッ！」

危険を知らせる橋聖の叫び声に気付いた時には既に遅かった。源命水の湖面から姿を現した黒装束の引き絞られた絃から矢が放たれる。

「ッ！」

心臓に狙いを定められた矢は、咄嗟の反応に辛うじて急所を外れる。胸元を感じた鋭い痛みは、鮮血が舞う光景に激痛となって全身を駆け巡った。

「凧！」

倒れ込んだ華奢な体を、走りこんできた橋聖が受け止める。

「ここは、命が蘇る神の地ぞ。湖に屍を落としたのが過ちであったな、閣橋聖」

禁忌の神手の異名を持つ命の源に落ち、蘇った黒装束のつがえた矢が橋聖へと向けられる。

「どうして、俺の名前を…」

瞳られた炎の瞳は、けれど自らの命を捕えた矢を映していない。

その炎を掻き消すような深い闇は、零れ落ちた問いに微かに笑う気配を漂わせただけで、応えようとはしなかった。

「輪廻の鎖は断ち切られるが定め」

再び引き絞られる弦。

残酷な光を放つ矢尻に、橋聖は腕の中で荒い呼吸を繰り返す風を無意識のうちに抱き締める。

あれは、ただの矢ではない。恐ろしい程に強力な呪力が籠められた、謂わば起爆剤だ。異物が肉へと捻り込んだ瞬間、呪力が爆発する。

「終わりだ」

終焉の言葉が紡がれる。黒き手が矢を離そうとした、その刹那。もう慣れてしまった震動が足元から脳天へと突き抜ける。次いで轟音を伴って激しく大地が揺れた。

その震動はいつもの比ではなく、全身を襲う衝撃に橋聖は歯を食いしばって耐える。背中へと回された腕の温もりが、沈みそうになる意識を辛うじて現世へと繋ぎ止める。

今ここで己が気を失えば、腕の中の彼女は助からない。

地震は中々収まってくれなかった。激しい揺れは脆い洞窟を容赦なくいたぶり、零れ落ちてきた岩の欠片がその徴候を伝えてくる。

落ちると、そう橋聖が確信した瞬間だった。

轟音を伴い、天井が落ちてきた。巨大で無数の岩が源命水で満たされた地底湖を覆うのは一瞬の事で、飛来する細かな破片から風を守る為にその体に覆いかぶさる。

## 第一章 転の舞・19

耳元を突風が駆け抜けていく。震動する大地に平衡感覚を完全に失い、強大な自然界の力の前では非力な人間でしかない橋聖は、ただ、神の怒りが鎮まるのを祈るしかなかった。

世界が静寂を取り戻したのは、果たしてどれ程の時間が経過した後だったのか。

大地の揺れが収まったのを確認した橋聖は、恐る恐るといった様子で伏せていた顔を上げる。確かについ先程までそこに存在していたはずの地底湖は上から落ちてきた巨大な岩に完全に覆われ、敵の姿は何処にも見受けられなかった。

安堵の溜め息をつき、肩の力を抜いたのはほんの数秒。腕の中から漏れ聞こえてきた呻き声に、橋聖の横顔に再び緊張が戻った。

「風。おい、わかるか？風」

呼びかけに、風は薄く瞼を開ける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

動かされた唇から、しかし言葉は漏れずに。

左胸に感じる熱と全神経を駆け巡る激痛に、まだ自分が生きていることを悟る。伸ばされた手は己を抱える橋聖の上着を掴み、乱れた胸元から覗いた赤色の水晶の首飾りが、風が覚えている最後の記憶となった。

\*\*\*\*\*

## 第一章 結の舞・1

控え目に扉を叩く音に、書物に落としていた視線を上げた。入室の許可を出せば、やはり恐る恐るといった様子で扉が内側に開かれる。

顔を覗かせた相手に、橋聖は苦笑を浮かべた。

「アゲハ。入って来い」

椅子に腰掛けたまま手招きすれば、数秒の逡巡を見せながらもアゲハは室内に入ってくる。左手に提げたバスケットの中身は、彼女が入室すると同時に室内を満たした芳醇な匂いに予想がついた。

「華蘭か」

「うん。華蘭の匂いは邪を退ける効果があるから」

早くよくなつてくれるようにと、机の上に置いたバスケットから取り出した、乾燥させた華蘭を潰して固めた魔除けの香草にマッチで火を点けた。

くゆる薄桃色の煙が片方だけ開けられた窓から流れ込んでくる空気の動きに乗って狭い部屋を流れると、爽やかな匂いが辺りに漂った。

「まだ…目を覚まさないんだね」

ふっと息を吹きかけてマッチの火を消したアゲハは、傍らのベッドで眠るその顔を眺めた。

その哀しげな呟きに、橋聖は組んだ膝の上に置いた書物を音を立てて閉じる。

「お前の所為じゃないと、俺は言ったと思うけど？」

「でも…ッ」

「アゲハ」

振り返ったアゲハの、涙の浮かんだ黒い瞳に、橋聖は言葉を遮った。伸ばされた手が彼女の腕を掴む。

あれから二日が過ぎた。度重なる地震による街の被害は比較的小

規模なものであったが、震源地の近くにある銀鉱山は大打撃を受けた。

掘り進められていた坑道の幾つかは落石によって完全に行く手を阻まれ、何よりも鉱山働者達を落胆させたのは、源命水の源であった地底湖が天井の落下によって完全に消失した事だった。

迷信深い者は言う。神の怒りに触れたのだと。

まるでそれを証明するかのように、毎日のように訪れていた地震は、源命水を失ってからぴたりと止んだ。

「取り戻せない時間を悔やむ奴を、俺は好きじゃない」

## 第一章 結の舞・2

冷酷にすら聞こえる言葉を贈れば、その先で歪められる幼顔。そばかすの散った頬を流れた涙に、手を放した橋聖はしかしそれ以上の言葉を重ねようとはしなかった。

再び向けられた背。微かに漏れる泣き声が静かな病室内に厭に大きく響き渡る。

昏迷した血塗れの風を抱えて知り合いの医師の許に飛び込んですぐ、誰かから連絡がいったのか母親を伴ってアゲハは駆けつけてきた。

風の流した鮮血で衣服を染めた橋聖の説明も、半分も耳に入っていたかは定かではない。ただ、彼女は泣きながら繰り返し返した。

自分の所為だと。

自分が炭鉱で父親が働いているなどと彼女に言わなければ、こんな事にはならなかったのだと。

他人が何と言おうと、彼女の呵責の念は晴れないだろう。

「橋聖。アンタは言葉がきついんだよ」

アゲハが開けっ放しにしておいた扉から、もう一人、聞き慣れた声が入ってきた。容赦なく橋聖の頭をはたいたのは、恰幅のいい宿屋の女将だ。

「アゲハは仕事の途中だろう？戻らなくていいのかい？」

女将の催促に、仕事の途中に寄ったアゲハは反論の余地を見出せずに渋々といった様子で一つ頷いた。

「大丈夫。タルマも言っていただろう？心配はいらないと。すぐに目を覚ますさ」

叶うのならば一日中風の傍に付いていた娘の赤毛を少々乱暴に撫でた女将は、彼女に付き添って部屋を出ようとすする。

「橋聖。眠っている相手を襲うんじゃないよ」

余計な一言を残していく事を忘れない女将に舌を出した橋聖の視

線の先で扉が閉ざされる。

「誰が襲つか、阿呆」

相手に聞こえないことをいいことに、聞こえないからこそ、橋聖はここぞとばかりに罵倒する。これが彼女の耳に届いていたら、間違いなく、問答無用で鉄拳がプレゼントされていたことだろう。



## 第一章 結の舞・3

再び、橋聖は狭い病室に一人残される。火の点けられた魔除けの華蘭は未だその役目を終えておらず、どうせなら外的な魔だけでない心の内に潜む不安と言う魔物も払ってくれたらいいのにと、そんな事を思った。

暇潰しに読んでいた本の重みが煩わしくなり、机の上に放る。目を覚ます気配を見せない穏やかな寝顔に、橋聖は盛大な溜め息をついた。

「訊きたい事が、山ほどあるんだけどな」

源命水に満たされた地底湖のあった洞窟で彼女が口にした言葉、天元郷。

彼女は、自分が呼ばれたと言った事自体に対して疑問は抱いていなかった。何故呼ばれたのか、その理由を知りたがっていたのだ。

彼女が知っていて、自分が知らない事とはなんだ。何故、命を狙われなければならない。

「それに…」

手に取った炎の水晶玉を、橋聖は思慮深げに見つめる。

色は違ったが、これと同じ物を、彼女も持っていた。診療室に運んだ彼女の治療を部屋を出る間際に一瞥した時、僅かにその胸元に認めたそれは、確かに、自分が所持している水晶と同じ物だった。

確認したいという気持ちはあつたが、無断で相手の荷物を漁るような無神経は持ち合わせてはいない。常時笑みを絶やさなかった育ての親は、礼儀だけは厳しく橋聖に叩き込んだ。

「といつても…質問したところで、素直に返答をくれるはずもないよな」

彼女は用心深い。誰にでも親しげな雰囲気を纏いながら、他者の確固たる一線を持ち合わせている。要するに、何を考えているのか判らない相手だという事だ。

笑顔の仮面の下に隠された本当の顔がどんなものなのか、橋聖は興味があった。

## 第一章 結の舞・4

微かに届いた軽やかな鈴の音に、橋聖は慌てて手の中の水晶を服の下へと隠す。音の発生源を探して彷徨った視線は、開け放たれた窓枠に姿を現した白猫に定められた。

「なんだ、チビ。ご主人様ならまだ眠り姫だぞ」

からかうように言葉を投げれば、白猫が動きを止める。尻尾を逆立て、向けられた金の猫目は、まるで人間の言葉を解しているかのように橋聖を睨み遣った。しかしそれも数秒で、一つ跳びで主の眠るベッドへと降り立った猫は、その枕元で足を折る。甘えるように鳴いた後、その頬を軽く舐めた。

「だから、まだ…」

苦笑を浮かべて柔らかな毛を撫でようと伸ばされた橋聖の手は、しかし中途半端なところでその動きを止める。赤の瞳が凝視する先で、微かに震えた瞼がゆっくりと上げられていった。

半ば夢の中のような焦点の合っていない深緑の双眸は、耳元の鳴き声に導かれるように動かされる。

「…結良」

擦り寄ってきた愛猫の頭を、億劫そうに持ち上げられた右手が優しく撫でる。

何とも微笑ましいそんな光景に、しかし何故か橋聖は小さな怒りを感じた。

こっちは二日間付き添ったのに、深傷の身の主人を今の今までほったらかして何処かへ行っていた子猫へと先に声を掛けるのか。

「…俺もいるんだけど？」

何とも納得いかず、少々不機嫌そうに呼びかければ、ゆっくりとその湖底の瞳が橋聖を捉えた。

「橋聖…さん」

## 第一章 結の舞・5

取ってつけたような敬称に、失笑を漏らした橋聖は椅子の背に体重を預けた。

「あんたさ、実は二重人格とか？」

「はい…？」

昏迷から目を覚ました直後にかけてられた唐突な問いに目を瞬かせる凧に、もとよりそれ程曲がっていなかったへそは正位置へと戻る。漏れる笑みが深いものになれば、更に彼女の不審感情は増したようだ。

「いや、なに…剣を持った時のあんたと今のあんたがあまりにも違うもんだからさ。ひよっとしたら違う人物なんじゃないかと思つて背中合わせの戯言の応酬。その名の通り凧いだ今の気配と、あの時の命に対しての冷酷さとは、決して結びつかなかった。

今でも、思い出すだけでも鳥肌が立つ。暗闇の中からぶつけられた殺気に、自分は恐れていたのだと思う。

「予想を裏切つて申し訳ありませんが、どちらも同じ私ですよ。この胸の痛みを信じるならば」

「痛むのか？」

「不本意ながら」

左胸の傷を庇うようにして上体を起こした凧は、痛みを顔に歪ませながらその声音に苦味を滲ませる。

「せっかく、話を聞ける機会だったのに」

深緑の双眸が細められた横顔に、冷酷さが過ぎる。

端麗な横顔が浮かべた表情に、橋聖は躊躇いもなく二重人格説を破棄する。笑顔の仮面の裏に僅かに覗いたもう一つの顔は、確かに同一人格だ。

## 第一章 結の舞・6

「その話って、俺にも関係があるよな？」

椅子の背を前にして座り直し、頬杖をついた橋聖は気のない様子で核心をつく。

ゆっくりと動かされた深緑の瞳。湖底に映った己の顔は、声音とは裏腹に真剣そのものだった。

「貴方をあの場所へと呼び寄せたのが彼等ならば、可能性はあります」

「それって、俺が命を狙われる理由になる？」

随分と素直に答えを返してきた凧に心中で驚きながらも、チャンスとばかりに橋聖は質問を重ねた。

「向こうにとつては、確実に」

「…俺、本気で命を狙われる理由に心当たりがないんだけど」

頬杖をつく手を変えた橋聖は、宙に視線を彷徨わせながら記憶を辿る。

確かに、用心棒という仕事は人に恨まれることは偶にある。大抵の場合は逆恨みで、それが稀に行動に移されることはあるが、あんな人間離れた相手から命を狙われる理由は、どんなに記憶を遡っても何処にも見つからなかった。

何故、自分はその場所に呼ばれ、命を狙われた？

「それにさ、あいつ、俺の名前知ってたんだよな」

御伽噺の中に出てくるような英雄じゃあるまいし、自ら名乗って歩く悪趣味は生憎と持ち合わせてはいない。

何故、あいつはこの名を知っていたのだ。

## 第一章 結の舞・7

「命を狙われる理由に心当たりは？」

元来より頭脳労働は得意な方ではない。答えの出ない思考を早々に諦めた橋聖は、思慮深げに沈黙を守る風へと問いを投げ掛けた。

「答えを知ってどうします？」

「ただの知的好奇心」

警戒を覗かせた相手に軽く肩を竦めて本心のまま応えれば、外された視線は窓の外に広がる青空へと固定された。

「民俗学者は、時として紐解いてはならない歴史に出会う事があります。余所者に知られたくない歴史の継承者である守人に命を狙われる可能性は零ではありません」

「つまり、知られたくない歴史だから、それを突き止めようとしているお前を殺しちゃえって訳か」

軽い口調で導き出された答えは、どう考えてもその態度が不謹慎に感じられるような非情な現実だった。

「嫌だね、短絡的な思考過ぎて」

「ですが、最も迅速で効率的な方法です」

耳に滑り込んできた平淡な言葉に床に落としていた視線を上げるも、その視界に映ったのは窓の外を眺める横顔だった。流れ込んできた風はその金髪が揺れ、燃やすべきものがなくなつた華蘭の匂いを攫っていく。

命に対して淡泊で冷酷な一面を持っていると思つた。しかし、その命という括りには、どうやら彼女自身のものも含まれているらしい。

ちらりと、机の上に置かれた短剣へと視線を遣る。

よく使い込まれているものだという事が一目で判る、十字架のような形状の短剣。両側に刃が付いていないそれが、鋭利な先端で敵の急所を確実に貫く為の武器だという事を教えてくれる。

彼女はこれで、一体何人の命を奪ってきたのだろうか。

## 第一章 結の舞・8

「知的好奇心を口実に、ついでにもう一つ」

今は血を拭われて大人しく鞘に納まつている短剣が記憶する数多の死から目の前の生へと思考を切り替えた橋聖は、見つめてきた森の瞳に人差し指を立てて見せた。

「断ち切られる輪廻の鎖　この言葉の解釈は？」

数多の伝承に触れ、そういった超自然的思考にも接してきただろう民俗学者は、あの洞窟で紡がれた意味深な言葉を、どのように解釈するのか。

緩やかに首を横に振られれば、漏れる溜め息。

「民俗学者は、ただ、過去を追う者です。大局を見据える占い師ではありません」

「結局、謎は謎のままって事ね」

華蘭の匂いが完全に霧散するのに十分な時間を費やした議論を通して辿り着いた橋聖の結論は、凧によって肯定される。

黙然と頷き、瞳を伏せた状態で再び思考の海に沈んでしまった相手を、橋聖はしばらくの間上目遣いに見上げていた。

凧の膝元で、吹き込んできた風が心地よいのか白猫が丸くなる。

視界の端に映るゆらゆらと揺れる尻尾が、何だか愛くるしかった。

「過去を追うことに、意味があんの？」

狭い病室に横たわる静寂を破った疑問に、凧は伏せていた瞼を上げた。

「過ぎ去った時の中に、今の答えがあると？」

何故、人は生まれ、死んでいくのか。何故、争いはなくならないのか。何故、人は誰かを想うのか。何故…。

尽きない疑問の答えを、生きている今現在、或いは未来ではなく、過去に求めることに意味はあるのか。

「さあ、どうでしょう。長いこと過去を追ってきましたが、その意



味はまだ、私自身も見出していないのかもしれませんが。ただ……」

「ただ？」

「命を狙われる理由　貴方が捜し求める答えは、きっと過去にある」

絡み合った森と炎。

主語が二人称だったことに、橋聖は心外そうに片眉を上げて見せた。

「お前も、だろ？」

主語の間違いを正せば、微かに失笑を漏らす相手。

## 第一章 結の舞・9

「…そういえば、アゲ八が？」

唐突な話の方向転換に、面白い奴だと内心で笑っていた橋聖は、投げられた問いを理解するのに数秒を要した。

「あ…？ああ、華蘭ね。お前が目を覚ます少し前に仕事に戻っていたよ」

「そうですか…」

燃え尽きてしまった、机の上の魔除けの香草を眺める横顔に差した翳りに、橋聖は敢えて口を開いた。

「あいつ、お前が怪我をしたのは自分の所為だって言って、今日も今日とて沈んだ顔でここに来た」

伸ばされた手が、小さな容器の中で綺麗な円錐形をしている華蘭の山に触れる。僅かな力でも崩れ落ちてしまったその灰が、まるでこれを持ってきた本人の心そのもののような気がして、凧は深い溜め息をついた。

「アゲ八の所為じゃないって、お前から…」

「そこに、どれだけの意味がある？」

戻した手で膝の上の結良の頭を撫でながら言葉を遮った凧に、頬杖をついているのにも疲れた橋聖は椅子の背に直接顎を預けた。

「だよなあ…」

溜め息混じりに、お手上げとばかりに橋聖は同意する。

彼女の呵責の念は、誰かの言葉で払拭されるようなものではないだろう。たとえその否定が、怪我を負った張本人のものであったとしても。

怪我を負った凧にとっては、その事自体は自身の不注意によるものだ。アゲ八の言葉は、ただ、自分を鉋山へと導くきっかけとなつたに過ぎない。

けれど、初めと終わりだけを知り、その物語を知らないアゲ八は

違う。

自分の言葉で鉦山へと向かった風が、怪我を負って帰ってきた。アゲハにとってはその事実だけが全てだ。風を鉦山へと向かわせたという原因と、怪我という結果が直結する。その媒介となる過程を知らない故の思い込みという主観ならば、客観性が入り込む余地などなかった。

## 第一章 結の舞・10

「だからといって、真実を話すわけにもいかないし」

実に難しい問題だと、そう呟いた橋聖の姿は、やはり何処か誠実に欠ける印象があつた。

所詮は他人事。そんな心の声が滲み出ているかのように。

「ま、元気なお前の姿を見れば、少しは気分も落ち着くだろ」

樂觀的展望で話題を打ち切った橋聖は立ち上がった。

医者を呼んでくるとそう言い置いて部屋を出て行った彼の気配が完全に遠ざかったのを確認した凧は、結良を撫でていた手を止める。

「結良。何か、手掛かりになるようなものは残っていましたか？」

白い体躯を横たえたままで頭だけ持ち上げた結良は、ゆっくりと尻尾を振る。

『何も。生存の確認すら、不可能だった』

結良の報告に、元より期待していなかった凧は落胆の様子は見せずに一つ頷く。

これは推測の域を出ないが、恐らく彼は死んでいないだろう。何とも怪しげな呪術を用いるあの影が、落石ごときで命を落とすとは到底思えない。

「不透明なのは、何とも不気味ですが…」

手掛かりは残された。話が聞けなかつたのは確かに残念だったが、空白の百年を追い続ければ、いずれまた、自分と彼等とが紡ぐ運命の糸は交わるだろう。

過去に答えがある。その確信が得られただけでも、今回はよしとしよう。

脈動を感じて鈍痛を訴えてくる左胸の傷に、凧は手を当てる。意識が途切れる間際に見えた、脳裏に残った最後の記憶。

「結良。彼は、本当に何者なのでしょうね」

## 第一章 結の舞・11

何気なく立ち寄った街で、彼と出会い、言葉を交わし、一時とはいえその背に命を預けた。

偶然と、そう片付ける事に対して、直感は異を唱える。

「私と同じ首飾りを、彼も持っていました」

その直感は、乱れた衣服の下で輝いていた赤色の水晶玉によって根拠を得た。

彼と自分が出会った事。それは、偶然では決してない。

必然。宿命とでも、いうのか。

「少し、彼と行動を共にしてみましようか」

今までに交わした会話では、彼の全てを見定めるにはあまりにも情報不足だった。まるで世界を斜め横から見ているかのような皮肉な態度の裏に隠された本当の姿を、知らなければならぬような気がした。

「あれだけ含んだ言い方をすれば、興味は持ったでしょう」

彼と行動を共にする理由は既に得られた。後は、彼がそれを了解するかどうかだ。過去を追うにしても、彼は一匹狼のきらいがある。果たして、同行者を迎え入れるだろうか。

「ここ数年で培った話術の見せ所ですね、結良」

柔らかな白猫の頭を撫でながらおどけたような笑みを浮かべて見せた凧の、窓の外に広がる遙か彼方まで続く青空を見遣る横顔は、何処か淋しげでさえあった。

\*\*\*

## 第一章 結の舞・12

「お世話になりました」

鉱山の事故を引き起こした大地震から七日。めでたく退院を許可された凧は、そのまま街を去る自分を見送りに来てくれた二人に深々と頭を下げた。

「せっかちな子だねえ。もう少し休んでいけばいいものを」

「有難うございます。ですが、先を急がねばならない理由がありますので」

恰幅のいい女将の別れを惜しむ言葉に、嬉しそうに微笑みながらも凧は決定を覆さなかった。

「まあ、人には人の生き時間ってのがあるし。無理に止める気は更々ないけど……」

ちらりと、女将は自分の横で俯いている赤毛へと視線を落とす。衣服をしっかりと掴んで離そうとしない少女に軽く吐息をつくも、特に何も言わずに再び目の前の異国の相手へと陽気な笑顔を向けた。

「またおいで、凧」

優しい言葉に、驚いたように微かに瞪られていた深緑の双眸は、広がる笑みにゆっくりと細められた。

「はい」

不確かな約束を交わし、凧は女将から傍らの少女へと視線を移す。

「アゲハ」

呼び掛けに震えた肩にそっと手を置き、膝を折ることで小柄な少女と視線を同じにする。恐る恐るといった様子で伏せていた顔を上げたアゲハに、凧は手に持っていた分厚い書物を差し出した。

「これは……？」

「私が今まで伝え聞いた、異国の地の伝承の一部を書き留めた物です」

不思議そうに見つめてくるアゲハに、凧は片目を瞑って見せた。

「話して聞かせる事は叶わなかったから。文字は読めますか？」

「あ…少し、だけなら…」

戸惑いながらの答えに、満足そうに「っ頷く。

「では、文字の習得する勉強にも役立つでしょう」

## 第一章 結の舞・13

差し出された書物を反射条件で受け取ったアゲハに微笑みを残した凧は、立ち上がった。

「好い縁が、再び交わりますよう」

胸の前で手を組み、再度深々と頭を下げた凧は別れの言葉を口にする。そのまま踵を返して歩き出した背を、追ってくる声があった。「手紙：出してもいい？」

大きな茶色の瞳に大粒の涙を浮かべながら、アゲハは遠慮がちにそう問いかける。

造船技術の発展によって活発になった大陸間の交流に伴い、『<sup>モ</sup>理想屋』と呼ばれる職種が誕生した。遠い地にいる家族や友人に手紙を届けるのは朝飯前。旅人のような定住の地を持たない流離い人にさえ、彼等は独自の情報網を用いて手紙を届けてくれる。

手作りだとすぐに知れる分厚い書物を両腕に抱えながら不安そうにこちらの返答を待つアゲハに、凧は穏やかに笑って見せた。

「ええ。楽しみに待っています」

そばかすの散った顔に広がった嬉しそうな笑みと、その頬を伝った穢れなき雫に背を向けたその歩みが、今度は止まることはなかった。

絶対に手紙出すから、という少女の契りを背に聞きながら、速い歩みに従って視界を流れていく風景から早々に民家が消える。鉾山を有するカツサラの街は当然の如く山裾に広がっていて、開拓された街から一步出ればそこは木々に囲まれた小さな森になっていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2776m/>

---

輪舞 - 神話異聞伝 - 第一話 邂逅する魂

2011年11月17日03時21分発行